

Li-tweet 二月号

目次

巻頭詩

繭たちのさざめき

崎本智 (6)

3

特集 二・一四恋愛事変

ストレインデイズ

うさぎ

6

行くな！ ガーゴン

常磐誠

22

雷の内部

る

32

其のX。真央。初恋地獄篇 小野寺那仁

35

横を向いたまま

日居月諸

46

自由創作

浜辺の童

しろくま

58

魚人岬

芦尾カツヤ

61

帰省

とーい

63

ランナーたち

安部孝作

69

黒牛の絵画

安部孝作

76

今月のレビュー

立ち食いそばのラーメン

とーい

80

必読！ ネット文藝

芦尾カツヤ

81

ガン・ガン・ガン

安部孝作

82

『タイム』嶽本野ばら

小野寺那仁

85

朝靄の食感

崎本智 (6)

87

編集後記

88

記録

89

特集

二・一四 恋愛事変

ストレンジデイズ

うやむぎ

小春日和の日曜日、午後の公園は散歩にちよよいのかもしれない。子供と仲良く歩く同じ年や少し上くらいの夫婦や手をつないで楽しそうに会話をしている若いカップルなどいろんな人々をネット越しに眺める。何組かは僕たちがやっていることに興味を示して止まる。

僕もそうなりたいたいと思って、自分と彼女をその二人に重ね合わせる。幸せってこういうのでいいのかもしれないと感じる。ビックになりたいたいか金持ちになりたいとかそういう大きい夢みたいなものより、安心して眠れる彼女の側に居たいと願う。彼女であるミズホと不自由しない程度のお金でゆっくりと生活できたらと思う。突然の金属音で僕の意識が野球に戻される。球は僕の守っているライトとセンターの中間辺りに飛んできている。センターから走ってくる仲間の足が遅いので、僕が「オーライ、オーライ」と声をかけながら走り込む。飛んでくる玉が、勢いを無くし重力に引っ張ら

れて落っこちてくる。僕のスピードと玉の落下速度を計算すると、捕球するにはギリギリだった。「間に合わない」なんて思ったら、絶対に間に合わないから後ろ向きなことは一ミクロンも頭では考えない。全力に走って間に合わなかったら、僕の日頃の努力が欠けているっていうことだ。僕はスピードを上げて加速する。その時、若干強めの風が僕の背中を押した。しかし、ボールには向かい風になるので、僕が再計算して落下ポイントを修正する。このままでは取れないと判断して、スライディングをした。グローブを掲げてボールを取ったことを審判にアピールする。審判が三つ目のアウトを宣告して、攻守交代となった。

「ナイスプレー」

チームメイトとそれぞれハイタッチをする。でも、褒められるのは恥ずかしかった。この草野球チームの監督兼選手である僕の高校の同級生が笑顔を浮かべて僕に近寄ってくる。

「シュン、ナイスだよ。お前、今日は調子良さそうだな」

「そんなことないよ。三打席全部三振だよ」

「またまたあ、そういう前フリをして打つんだろ？ 彼女も来てるんだし」

「そんな思春期みたいな頑張りほしくないよ」

そう言いながら、ベンチから出てネクストバッターズサークルで軽く素振りをする。

ミズホは、今日の試合を観戦に来ている。バックネットで僕たちのベンチの近いところで見ている。その姿はまるでプロ野球選手の

練習を釘付けで見ている子供のようだった。

僕は監督がかけた呪いの言葉が頭をよぎる。ミズホを見ると、僕と目が合うと「頑張つて」と口パクで言っていた。

ミズホのことを遮るために、ヘルメットを目深にかぶって滑り止めスプレーをバットに吹きかけた。

前の打者も、その前の打者もフォアボールで、九回の裏ノーアウトランナー一、二塁の状況で僕に打席が回ってきた。野球の神様は僕を試しているようだった。僕が、ホームランを打てば逆転でヒーローになるし、最悪のゲッツーが出ればA級戦犯者になる。

僕は一息大きく息を吐いてバッターボックスに立つ。

外野手の前で落ちるようなヒットを打つイメージをして、僕はバットを一度振る。そして、僕が構えるとピッチャーもセットする。相手がサインを確認し投球フォームに入る。僕は息を止めた。早いボールが僕の立っている位置より外のところに来る。僕は一瞬だけ迷うが見送った。

「ボール」と審判の曇った低い声がする。そこで初めて僕は呼吸をする。両チームのまばらな声援が聞こえる。

僕は、もう一回最初と同じことをする。さっきより早いリズムでピッチャーが投げてきた。さっきより、内に入ってちょうどいい高さでボールがやってきた。僕の腕が自然に出て行く。打った瞬間に感触があった。打たれた白球は高く遠くへと飛んでいく。その場にいた全員が同じ方向を見つめる。外野手は全員上を見上げながら追いかけるのを止めた。ボールは、フェンスの上を通り越して草が生

い茂ったライトスタンドに入った。

チームの全員が僕を出迎えるためにベンチを出てきた。僕はみんなにガッツポーズをした。三塁ベースを踏む時にミズホがネット越しに見える。彼女は自分のことのように飛び跳ねながら喜んでいて。僕がその日のヒーローになった。

「乾杯」

僕とミズホはグラスを軽くぶつけた。

「大丈夫なの？ みんなと一緒にじゃなくて」

「みんなと一緒にだと、ミズホに悪いよ」

「だって、今日の主役だよ」

彼女の瞳が少し大きくなった。何かを訴えてきている。たまにこのようなことを彼女はするが、僕には彼女のメッセージが一度も読み取れないでいた。

「僕はミズホと居たいんだ」

「わかった」

トーンが一個高くなった返事が聴こえた。僕の応えは間違いではなかったようだ。少し安心する。

「だけど、今日のシュンくんすごかったねえ。ホームランだよ。普通は打てないよお」

子供にインタビューをされているみたいでくすぐったかった。

「まあね」

「かっこよかったなあ」

彼女は本当に幼い反応をする。一口しかグラスに口をつけていないのに、彼女は酔っぱらっているようだった。

彼女の行動を肯定するなんて、自分がバカなのかもしれない。だけど、付き合ってから初めて僕が草野球をやっているところに彼女は来たのだ。そして、たまたま今日は僕が活躍したのだ。だから、もしかしたら他の人でもこんなにも喜ぶのかもしれない。彼女と長い間一緒にいると僕たち自身が客観視できなくなる。

僕とミズホは付き合って今年で二年になる。付き合ったきっかけはお互いの友人が主催した合コンだった。その時の彼女のことを今でも覚えている。だれに対しても同じ反応して、もしかしたらぶりっ子とかそういうイタイ子なのかもしれないと思った。一次会が終わった時の男性陣のミーティングでも「気をつける」みたいな話で要注意人物になった。

でも、二次会のカラオケの時に僕の彼女に対する印象が変わった。みんな最初は同じ部屋に居て、歌う人と喋る人に別れていた。彼女はどこに居たかと言うと、歌ってる部屋の外のソファにいて電話で話しながら困った表情をしていた。僕は彼女の電話が終わるのを待つて話しかけようとしていたが、電話が終わると彼女は携帯を放り投げて泣き出してしまった。彼女がそうなっていることを知っているのは、僕以外にいない。みんな自分のことだけしか考えていないようだった。

僕はそつと部屋を出て彼女に近づいて声をかけた。

「どうしたの？」

僕の声に反応してミズホが顔を上げる。そして、目に涙を浮かべながらも、泣くまいと頑張って話を始めた。

「あのね、お兄ちゃんからだっただけだね。もう家に帰ってこいって言われちゃったの。私は帰りたくないって歯向かったの。せっかく好きな人を見つけたのに、帰れないって」

彼女の家はきつと門限が厳しいのだろうと僕は思った。彼女が、どこかお嬢様っぽい感じがするのはそのせいだと納得した。僕は、軽い気持ちで彼女の相談に乗った。

「好きな人がいたんだ？ だれ？ 僕が協力するよ。教えて」
「言えないよお」

彼女が大きい声を出して拒否をした。僕の好奇心がくすぐられて、彼女の好きな相手の名前が知りたくなった。酔っている勢いも借りて僕はしつこいくらいに彼女に訊いた。そんな幼いやり取りをしている途中に彼女は腕時計を見て時間を確認した。

僕は帰っちゃうのかと思って残念がった。
彼女は自分の名刺に携帯電話の番号とメールアドレスを書いて、僕に渡してきた。

「だれに渡せばいいの？」

「また今度、二人っきりでご飯を食べようね」

そう言う彼女の顔を見て、ずっと眺めていたという欲求にかられた。

「じゃあね」

遠ざかっていく彼女が、一度振り向いて手を振った。僕も彼女に

手を振り見送った。急に僕も帰りたくなって時計を見ると十一時を過ぎた頃だった。

それから二人で会ってもいつもミズホは時間に細かかった。特に夜になるとうるさい。僕と会っていても、明日が休みでも、彼女は終電で帰る。僕と付き合っていて、一度も僕と一緒に夜を明かしたことがないのだ。そして、それが故に僕とミズホはプラトニックな関係を保っている。

ただ、それを僕は一度たりとも望んでいない。最近では、彼女が帰るのが当然だと僕も思っている。付き合った当初は、何かと理由をつけて一緒に居ようとした。ミズホは兄のことを話に出して僕の欲望を拒んだ。

今日は久しぶりに言ってみようかと下心に僕は正直に従った。

「ねえ、今日は一緒にいたいな」

僕はそれとなく言ってみた。彼女は考え込んだ。僕はダメ元で言ったんだし、どうせ帰るに決まっている。僕はカクテルを飲みながら、残っていたシーザーサラダを自分の皿に盛って食べていた。

「いいよ」

呆気ない返事で、僕は全身がフリーズした。

「えっ？」

ミズホが恥ずかしそうに応える。

「いいよ。今日は」

「やったあ！！」

僕の心の叫びが落ち着いた雰囲気を目無しにする。それから、僕

は一人で盛り上がりつつ強めのカクテルを何杯も飲んだ。彼女は嫌な顔を一切せず僕を受け入れてくれた。気がついたら彼女の腕時計もなくなっていた。

僕と彼女はその夜に初めて結ばれた。嬉しかったがお酒のせいで、記憶が曖昧である。

朝になって気がついたが、今日が月曜日で普通に仕事だったことを起きた時に思い出す。こんなことは今までに無かったし、僕が会社を休むなんて一年であるかないかだから仮病を使って、今日は休みにした。彼女はうまく起きたらしく、もういなかった。まるで、今まで一人でいたかの様に彼女の痕跡はなかった。

心配だったので、僕はミズホにメールを入れる。

せっかく、ずる休みをするなら平日の街を楽しもうとぶらぶら散歩する。いつも食べる牛井屋も私服で行くと気持ちがちよっと変わる。ちよつと食べ終わった時に電話がかかってくる。ミズホかと思つて楽しい気分電話を取り出す。そこには登録されていない電話番号が表示されていた。逡巡をした後に恐る恐る通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「もしもし？」と女性の声が出た。

「なんで、出ちゃったの？ あー、もう面倒くさい。でも、せっかくだから説明をしてあげる。あなたは真の愛についてどう思う？ 付き合っている彼女があなたの知らないところで淫らな行為をしていても、彼女があなたのことを愛していたら、あなたは受け入れられる？ 自分の前で清らかだったら許せる？ 包括的に人のこ

とを愛せますか？ 私は、あなたが出す答えを知っている。それで私はあなたを待っているの。あなたの純粋さがあなた自身を動かして、私を助けに来るの。待ってるよ。私は、継母や義理の姉たちがいじめめる家庭やいばらの生えた城や高い塔のようなファンタジーなどところにはいないの。わかった？ これが私の言いたいこと。じや、よろしくね」

僕は一言も喋らずに電話が切れた。

そして、それから一週間以上もミズホからは連絡がなかった。

僕は彼女がいなくなってから、朝起きた時と昼休みに入った時にいつもメールをして、仕事が終わると電話を毎日かけた。メールの返信は返ってこないが、電話をかけるとコール音がする。

こんなことは付き合い始めてから一度もなかったことで、僕は心配をしたし、頭の中はミズホのことで普段以上にいっぱいになった。こんなことを言っても信じてもらえないかもしれないが本当のことだった。

仕事が予定より早く終わって、先輩から「せっかくの金曜日なんだから、みんなで飲みに行こう」と誘われたが、僕はそのグループに混じるテンションじゃなかった。いつもならミズホとこの後会つてご飯を食べる予定だった。帰り道に毎日やっておまじないみたいに、彼女に電話をかける。しかし何回かコールした後に留守番電話になる。

今日もミズホと連絡が取れなくて寂しい気持ちを抱えて僕は、電

車に乗って自分の家のある駅に向かう。その途中でものすごい空腹感に襲われる。

僕の体は正直でお腹が空いたら心配を横にどけてご飯を食べてしまう。

空腹を我慢して、駅に着くと最近行くようになった商店街の片隅にある中華料理屋に入った。

ドアを開けると、椅子や机やカウンターの油で汚れてくすんだ赤色と所々シミになっている壁紙のクリーム色が目にはいる。厨房では、やることのないみたいで壁にもたれかかっているおっちゃんが、向かいに設置してあるテレビを眺めていた。

「いらっしやい」

覇気のない声で僕を出迎える。もし僕が美食家でそういう倶楽部を主宰している人間だったらこのおっちゃんはどういう対応をするのかと考えた。テーブルに置いてあるビニールが油でベトベトなメニューを開く。定食セットのページ、右の列の二番目を確認する。僕はこの二列三段の定食の欄を順番で食べると決めている。

「レバニラ定食ください」

「あいよ」

かったるような返事がして、おっちゃんは動き出す。お水はセルフだから、自分で取りに行く。一口飲んで口の中をニュートラルにする。おっちゃんは、さっきまでテレビに釘付けだった。何をそんなに集中して見ていたのだろうと思ひ画面のほうを見てみると、国民的アイドルグループが歌って踊っていた。僕より年上の人でも好

きになっちゃうんだと思ひながら時間をつぶすために彼女たちを見る。

曲が間奏になって、グループの女の子たちが何人も短い時間で映る。

僕はある一人の女の子を見て息を飲んだ。

なぜなら、その子がミズホにそっくりだったからだ。僕は彼女がもう一度映らないかと注意深く画面を覗く。すると、その他の女の子たちもどこかしらミズホの面影があるように見えてきた。アイドルなんかまじまじと見たことはなかったが、いつの間にかみんながミズホに似ているような気がしてきた。

結局、僕が探していた彼女は二度と現れなかった。画面が切り替わると、サングラスをかけた司会者が次のアーティストの紹介を始めた。頼んでいたレバニラ定食も僕の元に、ちようどよいタイミングでやって来た。

僕が定食を食べ始めるとおっちゃんがチャンネルを変えた。本当にあのアイドルが好きだったみたいだ。「だれ推し」なのが心に引っかかってしまう。テレビでは、東京の下町を探索している番組がやって来た。それでしばらくご飯に集中できた。

ちよつと焦げたニラとレバーが、オイスターソースが混じった湯気の向うに存在感を示している。もやしの白が色使用的にも食感的にもアクセントになって、僕の胃袋は満たされていく。

僕が熱々の鉄分とミネラルを補給しているとお客さんが入ってくる音がした。グループで来たみたいで足音がたくさんした。僕は、

そんなことより目の前のご飯を食べて本来の自分の問題に向き合
わなければならぬと思っていた。すると足音が僕の方に向かって
くる。

嫌な予感と言うのは、そう考えた瞬間から実現してしまう。

「すみません、シュンさんですか？」

若い男性の声が聞こえた。僕は「はい」と言って振り向いた。そ
こには、白衣を着て眼鏡を掛けた学者らしき男性がいて、後ろには
筋骨隆々のスキンヘッドとテクノカットの男がいた。

「突然すみません。妹のミズホいつもがお世話になってます」

話しかけてきた研究者風の男が、ミズホの兄と名乗って僕に一礼
をした。

「実は、シュンさんがきつとお困りだろうと思ひまして、ミズホの
代わりに挨拶に来ました」

「挨拶？」

「はい。別れの」

「別れ？ どういうことですか？」

「大変、申し訳ないんですけど、もうミズホに付きまとうのを止め
てほしいんです。あなたのおかげで彼女は失われてしまったんです」

「ミズホが失われる」という日本語が僕にはしっくりこなかった。

「さつきから何を言っているのかさっぱりわからないんですけど」

「あなたが一〇〇パーセント理解する必要なんてないんです。あな
たがミズホをあきらめてくれればいいんです。それにもうあなたの
前に同じミズホはあらわれないことはありません」

奇妙な世界に間違えて入り込んだにせよ、リアルが歪んでパラレ
ルワールドになってしまったにせよ、僕は全く今の彼の発言が受け
入れられない。

「あなた、頭がおかしいじゃないんですか？ ミズホに会わせてく
ださいよ。ミズホから話を聞かせてください。もう一週間以上会っ
てないんです」

「それは無理です。あなたのせいでミズホは失われたんですから」
「話を曖昧にしないでください！ ちゃんと話してください」

彼は「はあ」と短いため息をして後ろの二人に入り口に立って
きた。この店に居るのは僕と彼らだけになった。お店のおっさんは
さつきから見当たらない。トイレにでも行ったのだろうか。

「テレビを見て何か気づきませんか？」

僕は、彼にさつきの音楽番組を見ていたことをどこかで監視され
てたみたいな気分になった。

「あんまり見ないんで、よくわからないです」

「そうですか」と呟いて、彼は厨房にあつたりモコンでテレビの画
面を変えた。

「この女性を見てどう思います」

テレビでは世界の各国の変わった行事の映像を見て、画面の片隅
でリアクションしているグラビアアイドルの女性がいた。

「かわいいと思います」

「それだけですか？」

「そうですね」

「じゃあ」と言って彼はまたチャンネルを変えた。

「彼女はとうですか？」

大きいセットのキッチンで二人の料理人が料理をしている。そこでリポーターをしている女性アナウンサーが映った。

「美人だと思います」

「本当にそれだけですか？ いいですよ、ぶっちゃけても。ミズホはここにはいないんですから」

彼は少しにやけた声で言った。

「いや、そうだとしても僕からのコメントはさっきの二つだけです」

「あなたは嘘をついている。大きな嘘だ。今、映った二人には共通して思ったことがあるはずだ。どこかしらミズホと似ていると。そうでしょ？」

僕の背筋が凍る思いだった。僕は沈黙すること肯定する。

僕は二人の女性が出てきてびっくりした。彼女たちは、ミズホに完全に似ているわけじゃなくてどこか何となく似ているのだ。そっくりなことを正直に伝える気にはならなかったし、似ていると見えるのは個人の見え方によるものだから言う必要ないと思った。

「ミズホという女性は特別な人間だったんです。具体的な話は避けませんが、簡単に言えば全世界の女性のオリジナルで特別な人間と言えはわかってもらえますかね。その彼女をあなたが解放してしまっただけです。そのせいでミズホは失われたんです。わかってもらえませんでしたか？」

「そうだとしても、僕と彼女の関係にそれまで関係なかったじゃないですか」

「それはこちらでうまくコントロールしていたからです。ミズホは今まで一度も目をまたがずに家に帰ってきていた。それでバランスは保っていたんです。それが一週間前に壊れたんです。管理する側としては迂闊だったとしか言えません。でも、最近どうにか建て直しができた。それで、もうこれ以上あなたに邪魔をされたくないと思ひまして、今日ここに来たんです」

「そんなのいいがかりだ！！ それにミズホはちゃんといるんだろ？ おかしいだろ？ 俺とミズホの関係に入ってくるのは！！」

「あなたは、世界の理に逆らっているんです。もうこれ以上は控えてください。ミズホという女はいなかったと忘れてください」

彼は僕にお願いするように頭を下げた。

そんなこと言われても僕は忘れることなんてできない。僕にとつてミズホという存在は大きかった。そんな彼女を忘れることなんてできない。

僕の気持ちは怒りへと変わっていった。コイツをぶん殴ってやると思って、近づいていき腕を大きく振り上げる。しかし、振り下ろすことはできなかった。僕の腕はつかまれていたからだ。坊主頭の男が僕の腕をつかんでいた。男の力は強くて僕をそのまま押さえ込んだ。

「暴力という理性を欠いた行動は、慎んでいただきたいです」
「ふざけんな。お前に、僕の気持ちなんて解るわけないだろ」

「わかりますよ。愛おしい存在だったことは了解してます」

「軽々しく俺の気持ちを語るな」

僕はどうにかできないかと悪あがきをする。今度は、テクノカットの男も混ざってきて完全に動きが封じられる。

「しかたないですね。では、こちらで忘れさせてあげます。山田さん、佐藤さんよろしく願います」

「はい」と短く返事をして僕を抑えていた二人が僕の体から離れた。僕の正面に二人が立つと、テクノカットは右腕を坊主頭は左腕を弓のように引いた。まるで、サッカー漫画のツインシュートみたいな格好のパンチバージョンだった。二人のこぶしは見えないスピードで僕のボディに入った。僕は勢いで店の扉を突き破って道路に出た。全身が痛くて、思考することができなかった。意識が途切れる寸前に白衣の男が耳元でささやいた。

「これで懲りてください。もし、次やったらこれ以上にあなたを痛めつけます。今回であなたが諦めてくれると思っただけ救急車を呼んでおいたので、しっかり治療してくださいね。それじゃあ、失礼します」

その言葉を聞きながらなんとかコイツに歯向かう努力をしたが、指一本も動けなくて、白衣を汚すこともできなかった。

その日の怪我は全身打撲で全治一週間。会社に本当に怪我をして休むのに足りない背徳感で電話した。最初はクビになるかもしれないと思っただけ、診断書を提出するように言われて事なきを得た。

入院は実質三日で、残りは自宅療養だった。その間にテレビはたくさん見たし、ミズホらしきそっくりさんもたくさん見た。

でも、あの時のアイドルグループの彼女は一度も見えていない。そういう番組を見たが出ていなかった。これから、会社に復帰してもしかしたら見逃してしまうかもしれないと思って、ハードディスクレコーダーと二テラの外付けハードディスクを買った。

平日のゴールデンタイムはだいたいテレビを見るのができないので、週末の一日を使って一週間貯めた番組を全部見る。はじめのうちは、頭から最後までチェックしていたが、段々と早送りをするようになった。彼女たちだけでやっている番組は終わりまで油断できないが、音楽番組のゲストだと十分くらいしか出演しないので、そこだけ確認して、見つけられなかったら作業時間の短縮のためにその出番が終わったらすぐに消去をする。

そんな生活が一ヶ月続いた。僕はミズホを探しているのか、ミズホに似た人間を探しているのかわからなくなっていた。でも、目的として中華料理屋の一件であの博士みたいな男の手からミズホを取り戻したい衝動に駆られていた。

ある日の仕事帰り。新入社員が研修で入ってきて、そんな季節なのかと思っていた。年々、時間というものが加速しているような気がすると同僚と喋って、仕事のおかげで自分が少しは保ててるなと思いつつ家に着いた。着くやいなや電話が鳴った。仕事で何かあったのかなと思って、取り出すと「知らない番号」と表示されていた。ミズホがいなくなった日に電話番号を登録していた。僕は一回

深呼吸をして通話ボタンを押した。

「もしもし？ この前より潔く出たわね。それは褒めてあげる。でもね、あなたが自分自身の行動に疑問を持たなくていいのよ。あなたの行動は概ねその方向に動いてるから大丈夫。あなたはこれから大変な目に遭うの。こういうことは先に言っておく。この話はエンドレスで、どこまで続くかわからない。そんな話なの。あなたは、これからあるテレビ局に行くの。そうね、汐留のテレビ局。そこで、彼女があなたを待っているの。せっかく、今やっているテレビの情報で横流ししているんだから、ありがたく思いなさい。今すぐ確認して、行きなさい。録画で週末に観るなんてもったいないから。じゃあね」

テレビにスイッチを入れてテレビ番組を確認する。眼鏡を掛けたコンビの芸人がマイクを持って話をしている。

「テレビをご覧のファンみなさん、今回選抜されたこのメンバーはあなたの力を必要としています。今から、番組終了十五分前までにここ汐留テレビ局に来てください。そして、彼女たちに降り掛かるパイから守ってください。それだけです。あなたが真のファンであることを証明する絶好のチャンスです。あなたのパワーをあの子たちは待っています」

そう言い終わると、メンバー一人一人がカメラで抜かれる。懇願する女の子たちの中に彼女はいた。彼女も他の周りの子と同じような感じでカメラをじっと見つめていた。でも、僕にとって彼女は違うように思えた。オーラとか雰囲気とかそんなじゃなくて、もともと

と僕の横にいるはずの女性だったという自分勝手な思いだ。

僕は草野球で使っているバットを持ち出して、着替えずに急いで駅に行きテレビ局に向かった。電車がこんな遅いとは思わなかった。自分の足を使えば、電車より早く行くことができるんじゃないかと考えられた。

やっと駅に着いて僕は駆け足で改札に向かった。改札の向こうからサラリーマンの大群がやってくる。スーツの群れを掻い潜りテレビ局に向かう。僕の足は自然と速くなる。

テレビ局は曇りのせいでか、悪の巣窟、悪魔の塔のように見えた。その中に入っていくと奇妙な光景が広がっていた。

マッチを売る少女がいたり、赤い頭巾をかぶった女の子が彷徨っていたり、木の人形が歩いていた。僕はことは別のところにあるアミューズメントパークに来てしまったようだった。さっき見た番組のスタジオの場所が看板で出ている。それを頼りに局内の奥に進んでいく。さらに進むと変な人間がどんどん増えていく。パソコンを片手に持ちながらもう片方の手で入力をしながら歩く人、周りの人間にむかって鞭打つ女王様、二足歩行の忍者亀。僕はテレビの世界は知らないが、これが普通なんだと思った。

もし、僕に危害を加えるならバットで一撃加えてやろうと心配していたが、そんな危機的状況はなかった。

スタジオに着くと、やる気のないスタッフが長机にだらけた格好で椅子に座っていた。スタッフが僕の存在に気づくと立ち上がって迎えた。

「番組に参加される方ですか？」

「そうです」

それから出演の際の説明を細かくされる。途中で彼は僕が持っていたバットケースをちらちら見ていた。

「あの、私物の持込は禁止されるのでこちらで預かりますね」

僕はしぶしぶ了承をした。僕のたつた一つの武器を取り上げられたみたいで、寂しい気持ちになった。

僕は出番になるまでスタジオの片隅で待たされた。鉢巻を頭に捲いたり、法被を着たりする人が暴れ牛のごとく息巻いている。それに対して僕はスーツ姿で会社の帰りの普通のサラリーマンにしか見えないだろう。自分が来る場所を間違えたかのような錯覚に陥る。「だれを守り来たんですか？」とさっきの祭りの格好の男たちに訊かれるが、僕が名前を言うと「敵ですね。よろしくお願ひします」と握手を求められた。僕はルールがわからずに握手をする。人によっては、握手がない場合もあった。

さっきの受付のスタッフよりも、幾分威厳のあるスタッフが集まっている僕らの前にやってくる。

「えー、これからの流れを説明します。まず、出演者にそれぞれ何人集まったかをアナウンスします。その後、司会者が一番少なかったアイドルの名前を言って、笛を吹きます。そして、みなさんは守る側と攻撃側に別れます。攻撃する側はあらかじめセットに用意されているパイでターゲットのアイドルを狙ってください。そして、守る側はこちらもセットに用意されているプラスチックの盾で

守ってあげてください。以上、簡単になりますが説明を終わります。なお、あまりも行き過ぎた行為に対しては、退場や場合によっては法的処置をとります。テレビのショーなので、みなさんくれぐれもはめを外さないようにしてください。それでは、係の者の指示に従って移動してください」

僕は彼女を守ることにしか考えてなかった。移動している時にどこに盾があるのかをチェックしていた。セットに入ってすぐ左。つまり、入場者からすれば右にあることがわかった。

僕たちは城門イメージして作られたセットの裏にいる。格子状に組まれた板があつて、まるで簡単な檻に入られているようだった。正真正銘のファンの人達に囲まれたら、催眠効果なのか僕も一フアンだと思ひ込んでしまう。人数のアナウンスが始まるとみんなで一喜一憂した。ある種の団体芸みたいだった。そして、ミズホにそっくりな子と少しぶりっ子入っている子の一騎打ちになった。みんな、ぶりっ子のアンチなのかヤジが飛んでいる。しかし、ぶりっ子もその言葉をうまく面白いコメントで返す。それで出演者が笑っている。でも、きつと一番気が気じやないのは僕なのかもしれないと思つた。

そして、名前が告げられた。その瞬間、僕は完全に自分の全部を投げ打って彼女のことを死守しなければと思つた。

一斉に人間が動きます。みんなパイを持って攻撃に回った。僕は盾を持って彼女の元へと急がなければいけなかった。彼女はもうスタジオの隅にいて、何発かパイを食らっていたが致命傷になるほど

顔や衣装にダメージを負っていないかった。

「これ持って、スタジオを出て先に逃げて。僕は後ろを守るから」「えっ」と彼女は一瞬戸惑った。僕はその顔がミズホと似ていて嬉しくなった。

「早く」

と僕が急かすと彼女は盾を持って走りだした。パイを投げる人間も少し戸惑ったようで、何秒間手が止まった。その間に彼女はスタジオの出入り口の方に行っていた。僕も後ろに続く。僕は彼女に防具を渡してしまったので、無防備である。でも、彼女にとって僕自身は盾になればと思った。後ろを振り返ると若干名の僕の仲間が守ってくれていた。彼らにもものすごく感謝した。

遅れて僕がスタジオの出口に着くと受付にいたスタッフに尋ねた。

「さっき預かって貰った荷物どこにありますか？」

クリームまみれの僕は鬼気迫る勢いだったので、彼が気圧されていた。荷物を探し出して僕に手渡した。僕は彼に礼を言って、彼女を追った。彼女は廊下を駆けていた。

「どこか隠れるところあったら入って」

僕の話にうなずき、彼女は女子トイレに入った。僕は一瞬戸惑ったが、一か八かで彼女に付いていった。

入ると彼女以外にいない僕は安心した。

僕と彼女はこの場所に来るまでに体力を奪われたらしく、膝に手をつけて呼吸を整えた。自分が年を取ったのか、それとも最近の運

動不足のせいなのかかなり息が上がってしまっている。

「あの、なんで私のことを心配してくれるんですか？ これはテレビですよ。私はあそこでパイまみれになることで、番組的にはオツケーなんですよ」

「僕は君のことが心配なんだ。君にそっくりな人が失われてしまったんだ。君が彼女の代わりと言ったら恥ずかしい話だけど、僕は君のことが気になってしかたないんだ」

「おかしな人ですね」と彼女は笑みを浮かべて続けて言った。

「そんなこと今までにフアンの方に言われたことないですよ。それに『失われる』ってなんか変な話です」

「僕も変な話だと思う。夢だと今でも思ってるよ。ずっと僕は悪夢のような日々を送っていたんだ」

「でも、あなたの顔って、私の記憶の片隅になんとなくあって、見覚えあるかもって思ってるんです」

「気のせいだよ。そんなの嘘だ」僕は謙遜めいたこと言う。現実として受け入れられたくない気持ちがあるからだ。「これは何かの間違えだ」と頭の中で繰り返し返す。その一方で「これが夢ならなんでもできる」と思って、ダメもとで僕は彼女に頼みごとをする。

「もし、よかつたら君を抱きしめたいんだ。そうすれば、僕は失われた彼女を僕の心の中だけに仕舞えるかもしれない」

彼女は恥ずかしそうにしてうつむいた。そして、小声で「いいよ」と許可してくれた。

僕はその言葉で胸が高鳴った。まるで女性を知らない男性みたい

に僕は緊張をしている。彼女がアイドルだから自分が構えてしまっているとも考えられる。

許しを貰った後、僕は彼女に体を近づける。彼女も僕から顔をそらして、わずかに体をこちらに寄せてきた。もうすぐで彼女を抱きしめられると思った。体に電気が走ったような快感で震えがした。このまま彼女を僕のモノにしてしまいたいと思った。

そんな甘い一時はトイレのドアが開く音で破壊される。

「楽しい時間を過ごせましたか？ でも、もうこれ以上はいけません」

白衣を着た男、ミズホの兄とこの前のテクノカットと坊主頭の男二人が立っていた。

「いやあ、探しましたよ。意外と近いところに隠れてたんですね。灯台下暗しってヤツですか」

彼は楽しんで言っているようだった。それが鼻について腹が立つ。僕は抵抗するために背中に背負っていたバットケースから、バットを取り出して、剣士のように構える。

「あなたは初めて会った夜に酷い目に合っているんですよ、懲りないんですね。では、もう一度教えるしかありませんね。山田さん、佐藤さん、よろしくお願いします」

二人の男が前に出てくる。以前、コテンパンにやられた記憶がよぎる。僕にはホームランを打ったバットがあると自分に言い聞かせる。

相手は、僕を牽制しているのかジャブを多用しながら攻撃を仕掛

けてくる。僕はバットで相手のパンチを当てていく。バントの要領で、バットを両手で持ち、自分に来るパンチを当てていく。

女子トイレは男子トイレよりスペースが狭いから、相手も僕を挟み撃ちに出れないでいる。坊主頭が焦ってきて力が強くなる。僕も押されて、少しよろける。さらに強いパンチが来てもろに食らう。そのスキを見て、二人が並ぶ。左右の別々の利き腕を引いてこの前のツインパンチを繰り出した。僕はそれももろにくらいダウンする。しかし、僕はバットを杖代わりにして、なんとかふらつきながら立ち上がる。

弱っていると見た僕を痛めつけようと、二人がさらに追い打ちで攻撃をしてくる。

二人が同時に大きく振りかぶる。さっきより引きが大きい分、僕はタイミングを取りやすかった。僕も小さいながらバッティングの構えをする。二人がパンチを繰り出すタイミングで僕はバットを勢い良く振る。

金属バットの快音が鳴り響く。バットに骨が折れる感触が伝わる。その感覚は決してホームランを打った時とは違う、気持ちいいとは言えないものだった。

二人の男がうずくまる。そこを見計らって、僕は二人の頭を思い切り叩く。頭蓋骨が陥没するのがわかった。二人は気絶して動かなかった。

僕が二人を倒したと思って、軽く息をついた時に僕の頬に何かかすった様な気がした。手を当てて、水っぽい感触がしたので見てみ

ると、軽く一文字に切れた痕があった。

「きゃ」と後方で彼女の声があった。振り返ると彼女の近くに銀色に光るものがあった。メスだった。

「まさか、二人を倒すとは思いませんでした」

メスを片手に喋るミズホの兄がいた。僕はバットを構えるが、さっきの戦いでバットがベコベコに凹んでいる。僕がどうしようかと逡巡している間に敵はどんどん近づいてきて、僕は後退を余儀なくさせられる。背後にいた彼女の近くまで来てしまった。

「もう、逃げる場はなんですから黙って彼女を返してください」

男はメスを見えない速さで投げる。僕のスーツの右肩付近に刺さり、勢いで壁に貼りつられる。それに気を取られて二波三波に気づかなかつた。僕の左肩と右足に掠めて着ているものを貫通して、壁に密着する形になる。

「これでいいでしょう。さっ、お嬢さん行きましょう」

白衣の男が馴れ馴れしく、彼女に手を差し伸べる。

「いやっ！ 私はこの人と一緒にいる。それより。あなただれなの偉そうにさ。聞いててむかつくんですけど。ヒーローとか気取ってんの？ この人のほうがよっぽどヒーローなんですけどっ！」

「わがままですね。あなたが来ないと、この人がどうなっても知らないですよ」

メスが飛んできて、左足を壁につなぎとめた。

「ひどい」と彼女は言い放った。

「私はこの人と一緒にいる。あなたに屈したりしないわ」

「ジャンヌダルクみたいですね。いいでしょうあなたが来てもらうように仕向けるしかありませんね」

彼は白衣からメスを一本取り出し、僕の体の真ん中にある臓を狙う素振りをした。何もできない自分が恥ずかしかった。このまま、僕は死ぬんだと目をつぶって覚悟を決めた。その時だった。

彼女の声が聞こえた。

恐る恐る目を開けると彼女が僕の身代わりになっていた。彼女は崩れ去る。

「なんてことだ」

彼は自分のやったことを悔やんだようだった。

僕は何も言えなかった。僕が目を見開いて倒れているのを見ていたら、どんどん憎しみの気持ちがかみ上げてくる。今までに感じたことのない感情が僕を奮い立たせていく。

「うおおおおお□×◎#▲\$☆※ッ！」

僕は張り付けられていた壁から自分を引きはがした。そして、男の元に駆け寄る。男の首根っこを持ち上げ、地面にたたきつける。そのまま男に馬乗りになって顔だけを集中的に殴りつけた。どれくらい殴ったかは、覚えていない。僕の気が済むまで殴り続けた。感情の解放が終わると、僕はいつの間にか泣いていた。

彼女に近づいて、もう一度抱きしめる。今までの彼女とミズホの思い出を思い返し、僕はそれらをあきらめることを決意する。

そして、彼女が少しでも長く生きられるようにトイレの個室に隠した。

僕が完全にミズホを忘れるための儀式として、次の休みにミズホのマンションを訪れた。ミズホが失われたにも関わらず、部屋がまだあるかどうかは賭けだった。ミズホの部屋には何回か行ったことがある。女の子らしい、カラフルな彩りの部屋だった。外国の映画のポスターが貼ってあったり、テレビの上には僕との写真があったり、この部屋は主をまだ待っているようだった。僕はその一つ一つを見つめ、手に取って彼女との思い出に浸っていた。

だけど、僕は前に進まないといけないと思った。ミズホに似た彼女の死で僕は一步前に入る決断が出来た。最後に彼女たちに別れを告げるために、そして、彼女の生きていた証を、何か形見的なものを貰いにやってきた。

言い方は悪いが僕は彼女の部屋を軽く物色していた。

「泥棒ですか？ 本当にあなたとは、何かと縁がありますね」

振り返ると、顔に包帯を捲いた白衣の男が立っていた。声から察してミズホの兄だと思った。

「なんで、いるんですか？」

僕と彼の声がシンクロする。しばらくの間が流れる。

彼の方から話します。

「いえ、監視カメラにあなたが映ったからここに来たんです。別にもうあなたに危害を加えることはありませんよ」

「大丈夫です、もうあなたとは関わらないと思います。ミズホがないことを僕は現実として受け止めます。だから、今日は忘れ形見

を貰いにきました」

「そうですか」と言っただけで彼は笑っていた。

「あなたがそうしてくれるととても助かるんです。もう、ミズホという人間はいないのだから、これ以上問題を大きくして欲しくないで欲しい」

「わかりました。約束します」

「じゃあ、忘れ形見とやらを持って行って好きな時に出て行ってください。この部屋は引き払うつもりです。ここはもうなくなります好きなものを持って行ってください」

「はい」

「もう二度と会わないことを祈ってますよ」

白衣の彼は出て行った。それからどれくらいその部屋にいたか見当もつかなかった。部屋を出た時には日が暮れていた。

僕は彼女とデートで行った遊園地の非売品である小さいオルゴールの宝箱を貰って帰ってきた。

その日を境に僕は普通の日常に戻った。

仕事に行き、同僚と飲んだり、たまには合コンに行ったりした。でも、毎日寝る前にオルゴールを聞いて寝ていた。時々、僕の核心に迫る夢を見てうなされて起きた夜もあった。

ある金曜日の朝、僕はその日は目覚めが良くて、気分も良かったから滅多に作らない朝ご飯なんかを作ってみる。近くの百円均一のコンビニで卵とハムと千切りになっているキャベツなんかを買ってハムエッグを作って満足する。ご飯を食べていたら携帯電話が鳴

った。出勤前から電話をかけてくる友人や同僚を僕は知らない。

着信番号は「知らない番号」だった。通話ボタンを押す。

「もしもし？ よくもまあぬけぬけと電話に出たわね。信じられない。忘れるために努力しようとしてもダメ。あなたは縛り付けられているの。それを感じないだけで、自由になったと思ってるようじゃ、あんたもまだ中途半端なのよ。口だけの男なのよ。自分に嘘付いている日々は楽しい？ そんなものを見させられても全然面白くない。もっと面白くしてあげる。いい？ 今からテレビをつけなさい。チャンネルはどこでもいいわ。わかった？」

僕は無言でテレビをつける。朝のニュースで芸能情報をやっている。アナウンサーが軽快な喋りをしている。

「次のニュースはこちらです。今日、一面の新聞もあります。有名女優に熱愛スクープです。しかも、お止まりデートの現場を週刊誌が直撃しています」

画面が切り替わる。

フードを被った女性と白衣を着た男性が映っている。よくよく見ると、男の方はミズホの兄だった。そして、フードを被った女性をちゃんと見ると、ほとんどミズホにそっくりな女性だった。こちらの方が、大人の色気があってミズホより美人である。ミズホは年より幼い感じが良かったが、こっちの方が好みかもしれないと思った。

電話から声が聞こえる。

「うふふ。ビッチな感じがする？ それともこのニュースに禁断の愛見つけちゃってる？ あなたがこれを知って、頭も下半身も興奮

したのがわかったわ。そして、あなたに衝撃を与えられて満足しちゃった。あはは。さあ、迎えに来る口述が出来たわね。待つてるから今度こそ本当の恋をしちゃいましょう。じゃあね」

電話が不通になる。しばらくは思考が停止して動けずにいた。そして、僕は動き出す。

玄関にある、バットケースから新調したバットを取り出す。そして、ミズホの忘れ形見のオルゴールを何度も叩く。みじん切りをするみたいにモノの原型がなくなるまでバラバラにする。

テレビを見るとまださっきのニュースにコメンテーターがなんか言っている。僕は、さっきの女優をパソコンで調べて、所属事務所を調べる。事務所がわかったらその所在地を調べて、周辺の地図をプリントアウトする。それを持って、僕はバットを再び持って玄関に向かう。

玄関を開けるとさっき買い物に出で行った時より日差しが強くなっている。そんな清々しい朝の中、僕のミズホを巡る戦いは第二章に突入した。

(了)

行くな！ ガーゴン

常磐 誠

百合神悠は激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。悠は政治が少しはわかる。

学業優秀、スポーツも人並み外れた実力を見せ、特に幼少期から剣の師匠の下に内弟子に入り、振るい続けた剣道の腕は全国でも有名になるほどである。その正義感たるや察して余りあるというものだ。

「……………」

ピン、と伸びた背筋の緊張。悠の利き腕である右腕の小刻みな震え。顔を見ずとも俺にはわかる。顔はいつも通り柔和な笑みを湛えているに違いない。だが、その双眸が開かれたが最後。絶対にその目は笑っていない。薄開きの目をしていることだろう。

「えっと、そこで何をしている訳？ ぼーっと突っ立ってるのには何か意味があるの？ 剣人」

悠は特に何の気持ちも込めること無く後ろに立つ俺に声をかけた。

「いや？ お前こそどうしたよ？ ちょっと通りがかっただけだぜ？ 俺は」

話しかけられた俺はそう言って誤魔化した。人の背中を見て勝手に激怒させてみたり邪智暴虐の王に殺意を抱かせたりしているのがバレル訳はないが、妙に勘は鋭い悠のことだ。警戒はしておいて損はない。と思つての行為だった訳だが、

「嘘だ」

速攻でバレる。まあ俺嘘下手だし。しょうがねえか。でもすぐバレるのが癪で、ちよつとだけ言い逃れを試みる。

「いやいや。俺が嘘ついてどうなるってんだよ？」

「そうやって言葉尻が上がるのはお前が嘘ついてる時の癖。わざとやってるのかってくらい露骨に上がってる」

「これが高等テクってや……」

「ダウト」

くそつたれ。

この癖だけは本当に治らない。頭を軽く搔く。悠は全盲の癖に、というか、全盲だからこそ、視覚以外の情報に対して本当に鋭敏に反応する。音、香り、勘。本当に、鋭い。この鋭さにまた一本取られた形の俺はばつの悪さに話題を変える。

「で、衆議院解散のニュースを流すテレビを前にお前は何をやってるんだ？」

テレビに映る緊急ニュースではついに衆議院が解散となり、朝から何度も何度も、バカバカしい万歳三唱の音が耳にけたたましく響く。

「王の圧政がこのような事態を招いたのだ。こつそりと道行く老爺の肩を揺すり尋ねれば、『王様は、人を殺します』と答えるに違いない。とりあえずお前はそう思ってる訳だよな？」

俺が尋ねてみると、思う以上に即答で悠は言葉を返してきた。

「いや意味が分からないよ。王って誰？」

「お前は衆議院が解散するニュースを見て激怒したんだよ。そして必ずかの邪知暴虐の王を除かねばならぬと決意する訳だ」

「……………」

「……………」

二人して沈黙。そこに、ゴツゴツとガタイだけは不必要なまでにゴツく厳めしい奴が来て、

「そろそろ終わるよな？ ……って、二人して何無言で見つめ合っ

てんだよ。気持ち悪いよ。何だ？ 新たな目覚めか？」

気持ち悪いことを言ってくる。ふざけんなよ気持ち悪い妄想はてめえだけでやってろよ、と言おうとしたが、

「ちよっと聞いてよ。今日の刃人は暇過ぎて頭がおかしくなってるんだ」

という言葉に遮られてしまった。っておい待てや。

「別におかしかねえよ」

「半音上がった」

「上がったねえし」

「上がったなあ」

「真彦てめえは黙ってる、バカ」

ゴツゴツ野郎の大バカ、真彦には軽く釘を刺しておく。

「あ、いや、そうじゃねえんだよ。悠。お前にちよっと用があつてな、そろそろ終わるだろって思ってる、な、来た、ん、だが……………」

スイッチが入るのは突然のことだった。

いや、一応段階は踏んでいたか。真彦の発言の途中から悠の様子は本当に一変した。

そろそろ終わるだろ、の瞬間に悠はテレビを切った。もちろん電源を、だ。この部屋に真剣はない。

思ってる、の段階で悠は一気に眉間に皺を寄せた。思い出してしまったようだった。何をか、というのは俺にもわからなかった。

な、の所で悠は両手を組んでパキ、ポキ、と音を鳴らした。

来た、で悠は見えないはずの目を開いた。悠は怒るといつも目が薄開きになる。何か、目が見えないはずなのに、というか、だから

こそ何かしら人の心の内を見透かしてしまうような、そんな恐怖、というか威圧感を相手に与える目。そんな目で今悠は俺や真彦を睨んでいた。

「…………なあ、あいつめっちゃ怒ってるけど、何があった？」

悠の眼前で、大きなガタイをした真彦が面白いくらいに——かと言って笑うことは到底できないが——ヒソヒソと小声で、隣に立つ俺に尋ねた。

「いや知らねえよ」

俺は俺で真実を耳打ちで返すしかない。

「漢は言葉も使わず語る、とか何とか言うけどよ……語り過ぎだろ、ありゃあ……」

「とりあえず訳を聞いてみなけりや始まらないよ、な」

訳の分からない怒りを湛えた悠を二人して見る。悠は小声で、しかしハツキリと通る声でしゃべり始めた。

「今日は久々に師匠もいないし、学校も休み。自主トレや稽古も時間を調整すればどうにかなると思っていた……」

そういえば今日の稽古やら何やら、三人揃ってないとできないことはことごとくこの時間を避けるように悠は予定作りをしていたな、と思いつく。

「全てはこの時間、この時間にテレビを見ること。その為にここまで頑張ってきたんだ……」

「ただだけ見たかったんだその番組。今昼下がりなんだがまともな高校生男子が見たがるような番組なんかやってるか？」

「アレ、だよな……？」

真彦が指を指して言葉を挟む。悠がその指で差すものを視線で追うことや読み取ることができないが、こいつはバカだからしょうがないか。

「そうだよ。アレ、だよ……！」

読み取ってるよ、おい……！！

そんな軽い驚きはともかくとして、真彦の指の先には怪獣のぬい

ぐるみが置かれている。俺たちが幼稚園に通っていた時に三人とも大好きだった幼児向け特撮アニメの悪役怪獣のぬいぐるみだ。ずんぐりむつくりな体系で、その顔自体は何を考えてるのかわからないというかもアホなんだな、という言葉一つで納得してしまいかねない半開きの口。縦長の目。そして腹に凶悪そうな模様。もしやこっちが本当の顔？ とか思わせておいて実は全然そんなことはありませんでした。そんなツツコミどころ満載、というかも色々扱いどころに困る悪役怪獣のぬいぐるみが悠の後ろ、窓際の棚の上に鎮座していた。

どうしてそんなものがここにあるのか。そしてそれが何に関係しているのか。もはや言うまでもない。聞くまでもない。

「どうして……」

悠の独白は続く。

「何故このタイミングで解散なんかしてくれただ！ お陰で特番組まれて『行くな！ ガーゴン』が潰れてしまったじゃないか！」
「やっぱそれかよ！」

「畜生！」

叫ぶ言葉と同時に悠の左手が机を叩く。項垂れたその姿が本当に無念そうに見える……のは大いに問題があるような気がするのだが。

「まあ、もうお前もこういう幼児向けアニメからは卒業しようぜ、ってことなんだよ」

「適当なことを俺は放っておく。でもこれ、結構本心なんだが。」

「剣人、お前はこの作品の良さがわかってないからそういうことが言えるんだよ！ 僕がどれだけこの作品を楽しみにしていたか、わからないだろう！」

うわあ……。引くわー。という表情を露骨に出しても、こいつには伝わらない。そもそも、アニメをアニメと言わず、作品、と呼ぶ時点で何かがおかしいんだ。こいつは絶対にそうは思わないんだろ
うが。

「まあ、何だ。悠。そいつ悪役だし、悪い奴だぜ？ 可愛がるなよ。ガーゴン忘れて剣道へゴー？ みたいな？ ハハッ！」

真彦のお寒いギャグ——にすらなつてねえんじゃねえか？ まあこの際はそれは放置しとくけどさ——が飛ぶ。悠はガーゴンのぬいぐるみを抱えて机に突っ伏している。……子供か！ しかし反論だけは早い。

「これがどれだけショックかわからないだろうね……。二人には。ふざけてるよ。あの首相。かの邪知暴虐の首相！ このタイミングだけはない！ ないよ！」

つーか本当にあの時テレビ見ながら本当に激怒してたのかよ！ かの邪知暴虐の王、じゃないけど首相に本当に殺意抱いてたのかよ！

俺のアテレコ、意外と当てになる。……そんなこと考えてる場合でもない、か。

「もう良いじゃねえかよ。な？ 悠。おめえオタクじゃねえんだから……」

その発言もまたスイツチだった。

「オタクの何が悪いッ！」

この言葉が今日一日で俺が聞いた一番の大声だった。俺も真彦も面食らうしかない。

その後のことはもう細かく言い表すのも正直苦痛だ。

何故か正座させられる俺と真彦

こんこんと説教される

熱の入るオタク講座

特撮アニメの何たるか

ガーゴンはかわいい

かわいいは正義

故にガーゴンは正義

悪役でも正義

そもそも悪役は悪人（悪獣？）じゃない

見てよこのとぼけた顔！ どこからどう見ても悪い子じゃないでしょ

熱弁を振るうのは結構だがお前はその顔を見たことがない。

正座を解いたり欠伸したりすると——音はたっていないはずだった——剣道で鍛えられたためちやくそ早え手刀が飛んでくる

何でわかんたよ？

とにかく打たれまくる俺と真彦

イラツとくる

真剣白刃取りしてみる

今度は蹴られる

蹴り返してみる

ガーゴン（ぬいぐるみ）に噛まれる

えー。と固まる俺と真彦

説教続行

今日放送予定だった話の気合いの入った解説

自分がそれをどれだけ楽しみにしていたか

そして『行くな！ ガーゴン』が潰れたことの無念さの激しい解

説

それはまさしく他の手を振り解いたりもしていないのにも関わらず菩薩から垂らされた糸が切れて落ちてしまったカンダタのよ
うな心境

世の菩薩というものはここまで悪辣な行為をかくも平然と行っ
てくれるというのか

以下エンドレス

結論

……なんだただの地獄か

いや、じゃなくて。何なんだこの地獄は！ 意味がわからない！
硬直した頭で思い出すのは高校での悠の友人関係。そういえば訳
の分からん連中と悠は最近仲良くしている。何か同好会か何か組ん
だんだとか言っただけだったか？ そもそも剣道部に所属しておき
ながら同時に他の部活なり同好会に所属することは校則違反だろ
うがよ。あいつらはそれを知ってながら会員の人数を三人にするた

めに強引に悠を名目上の面子に入れていっているのだ。そうじゃないとま
ず同好会すらも認められないからな。

悠も悠だ。あいつらの所為でそうなったのか、とか問われると全
くもって違う——からこそ誘われちまった訳なんだが——が、一番
大事なのは剣だろうが。オタクっぷりに拍車かかっちゃってる。

「ちよつと！ 聞いてる？ 剣人！」

うるせえな聞く必要もねえ話だろうがよ！ そもそも師匠の前
ではそのオタクっぷり微塵も出さずに隠してる癖によ！

口に出して言ったら羽交い締めになれちゃうから黙っておく。この間のは効いた。
俺が余りにも冷静じゃなかった、というのもあるが、そもそもケン
カで関節技を平気で持ち出すこいつの情け容赦のなさには呆れる
ものがある。

そう思っていた時に、救いの神の声がかかる。

「ただいま帰りましたー」

寫の声だ。良かった。これでようやく解放される！

その小柄な体つきと同じで、ちよこちよこと歩いてくる寫の手に
はDVDらしきディスク。

「あ、借りてきてくれた？」

悠はいきなり機嫌の良さそうな声で寫に尋ねる。寫はそれにはい
く。と即答する。さっきまでの不機嫌さ加減はどこいったよ。

「はい。ところで、どうして真彦さんと剣人さんは正座されてる
んですか？」

よしよしよくぞそこを訊いてくれた。流石気の効く奴だ。
かくかくしかじか。説明する。

「それは少し反省が必要ですね！ もう少し正座してるのが良い
と思います！」

なんでやねん！

ああ。忘れていた。こいつも行くな！ ガーゴンになるところな
るんだよ。ああ。すっかり忘れていたさ俺のバカたれ。

「俺、もう足が痺れてるぜ……」

右手の親指を立てて誇らしげに真彦が白旗宣言。

「修行が足りません！」

「マジかよ！ 罵にそれ言われるのかよ……。そこは許せよ……。
お前らとはウエイトが違うんだよ……」

「ガーゴンに謝りなさい！」

「えー」

「えー。じゃありません！ 謝るのです！」

「謝るのです」

悠まで調子を合わせて謝罪を迫る。すげえなオタク。

「一先ず頭下げれば正座と下らない説教から解放されるのだ。それ
だけ、それだけを目的に俺ら二人はあっさりと頭を下げた。ガーゴ
ンさんマジさーせんした。ウイッス。」

「つかさー。ガーゴンはかわいくはねーだろ？」

真彦のバカが口を開く。これぜってースイッチだろ？ 学習しね
え奴だなあ。ほら。悠と罵が顔を見合わせて頷き合ってるぜ、真彦。

とりあえずガーゴンが飛んでくるんじゃないね。

「ガブ。がおー！」

ほら。罵の音声付きで。怖くもなけりや痛くもねえけど、ガキか
つて。

「いやいや、どんだけ見たって。ほら、かわいくない」

「がおー！」

「謝れ！ ガーゴンに謝れ！」

ほらまた訳分からんことに……。

「ガーゴン実物は体長数百メートルに体重十万吨だぜ？ ぜっ
てーかわいくねー！」

真彦までそういう話題について行きだしたしね！ 何だこいつ
ら！

「ガーゴンはかわいい！」

「かわいいは正義です！」

「ガーゴンはかわいいから正義！」

「ぜってーかわいくねーから悪だろ？」

「この憎めない顔！」

「その顔をお前は見たことねーだろが」

「見なくてもかわいいはわかるんです！」

「意味わかんねえよ」

「このフォルムがかわいい」

「いやフォルムで」

「こう、こうして、丸みがあつて。うん。かわいい！」

「いやだからそれはぬいぐるみだからであってだな……」

テレビのある和室で繰り広げられるオタクによる怪獣アニメ談義。めでてえこった。埒あかねえよこのバカどもが！

「俺はもう良い。とりあえず稽古行かねえとな！」

その言葉を捨て台詞にして部屋を後にしようとした。その瞬間に聞こえたのは、

「あ————！！」

という罵の悲鳴。何事かと皆で罵とその手にあるディスクを見る。

「これ、……DVDじゃないです。よね……」

紙袋の中のディスクをちらりと見て確認してみると、それには確かにブルーレイの標章が描かれていた。

「あー。違うな」

俺なら間違わないだろうが、機械音痴、というかあまり詳しくない罵なら間違えそうだ。というか、ちよつと前に間違えてた。だから今回は気づくのが早かった訳だ。

……ま、おせーけどな。

「見られ、ない？」

罵の疑問系の言葉。いやそりゃそうだろうよ。

「……………」

「……………」

分かりやすい二人の沈黙と項垂れ。落ち込み様が半端ないが、まあこれから稽古だ。頑張ってもらわないとそれは困る。

「んじゃ、行くか。真彦。悠は頼むわ」

「おう。行くか」

真彦に引き摺られ、悠も道場へと向かう。「あ……………」

呟きと共にガーゴンの様な半開きの口。その口から魂が抜けて行っているのが、別にスピリチュアルだとかそういうのを信じているでもなく持っている訳でもない俺にも見えるようだった。これはあの時の借りを返す絶好の機会だな、と俺は打算的に思っていた。

そしてそれは思いっきり間違いだった。あいつこういう時むしろすげえ気合い入るのな。八つ当たりだろうけど、打ち込みの気合いだもんじゃねえ。数割増だった。八つ当たりだろうけど。まあ幼児向けアニメ見られなかったことに対する八つ当たりだろうけど！

ガーゴンそんな好きか！ もうガーゴンと結婚してしまえ！ そんな幼稚な文句も口をつけてしまえばそうになるのをぐっと堪えて——流石にガラじゃないだろ？——、じつくりと向き合った。決して負けっぱなしだった訳じゃない。数的には、五分、だったろ。この前みたいなことにはならない。それに、やっぱり気合いはある。でも十二分なメンタルでない悠だ。崩れはある。むしろ、十分でない悠に対して五分を越せない自らの鍛錬不足を責めるべきか。

竹刀を握っている間はともかく、そうでない時の悠の落ち込みようは確かに大きかった。師匠も当然気づくが、その原因を詳らかに語る訳にはいかない。師匠はオタクを理解しない。できない。ガーゴンかわいい！ 力説すれば鉄拳が飛びあのぬいぐるみは速攻で燃やされる。だから悠のガーゴングッズ——そう。あのぬいぐるみ

以外にも大量にあるのだ！ これだからオタクは……——は罵の部屋に全てある。孫娘の趣味、ということにしておけば、

「……孫の教育、というものにはあまり口出しはできぬ、よな……」
ということにしておけるのだ。よもやあの殆どが内弟子の悠のもので、なんて分かる訳がない——そう。罵は悠に影響されてガーゴンにのめり込んだクチだ——。このアイディアは悠の祖母やその兄貴にあたる爺さんが幼い日の悠に教え込んだものだが、完璧すぎる。それを約十年徹底して守りきっている悠には正直驚きを禁じ得ない部分もある。そして俺らもよく話してないよなあ。……何かおごつてもらおうくらいはしてもらっても良いよな。そんな気がしてきた。急に。

翌日学校に行くと、例のアニメ・漫画同好会の連中が二人して俺に突っかかってきた。

「一体全体どういふことなのですか？」

「説明を求めろ！」

朝一からうぜえんだよてめえらはよ。

「何が」

短い言葉にとつと失せろ、という意味合いを乗せてぶつける。が、こういう人種はそういう気持ちを読み取るのが苦手というか、できないんだろう。昨日の悠もそうだったし。オタクモードの悠がめんどくさいのと同じ理由で、というかそれ以上のグレードで、こいつらはめんどくさい連中なんだろう。たまらない。

「悠殿は元気がないではないか！」

「悠殿の覇気がないではないか！」

あーはいはい。理由は知ってるが語るつもりはない。

「理由は知ってるぞ？」

「もう本人から訊きましたからね！」

「じゃあ何故俺に話しかける」

俺は悪くない。悪いのはタイミングの悪い衆議院解散と、対応していないディスクを勘違いして借りてきた罵だ。

「これは彼を励ます方法を考えねばなるまいよ！」

「あーつとこんな所に最高のアイテムがーッ！」

無駄に息の合いまくりな二人組の片割れが制服の胸ポケットから出してきたのは、「映画の前売り特売割引チケットお？」

タイトルを確認する。

『行くな！ ガーゴン くだって爬虫類だもん♪』

うおおおお……。

「さあ！ これに誘うのです！」

「誘うが良いのです！」

意味わかんねー。

「つかこれお前らどこで手に入れてくんだよこんなの……」

「こんなのとは心外ですな！ それはこの僕が近所の小学校付近で配っている人に頭下げまくって手に入れてきたんだよ！ いや、これ小学生以下に配る物だから……とか言われても、でも高校生も使えますよね？ 使えますよね！ と食い下がり、小学生に気持ち悪ッ！ とか、あまつさえ無言で防犯ブザーを鳴らされても心折れ

ずに土下座付近まで頭を下げて手に入れてきたものなのだよ！」

その熱意はどこか別の場所で使えよお前ら恐ろしいわ！

「つか三枚もらってんならお前ら二人で悠を誘って行きや良いじやんか。俺を巻き込むな」

「この割引券は一枚で三人分割り引けるのですよ！」

「手に入れてから気付きましたでござす」

アホかと。

「それに……」

それに、何だよ？ 俺の言葉に対し、

「同好会を作る条件として、活動内容の報告があるんだよ。そもそも基本はザルなんだけどね、けど、ほら。やっぱり僕がいるからその特例をスルーはできないってことで」

横から悠が入ってきた。

「映画を見てレポートを書いて、それを提出するくらいはしろ、と相成った訳です。それにメンバーも多い方が好都合ですし……」

少し申し訳なさそうに同好会の正規メンバー二人は言う。なるほど。自分たちの利益もバッチリある訳か。納得。

「御免被る」

言葉短く返答。二人が大きく落ち込む。レポートなんて書けるかアホんだら。二人は慌ててレポートは自分たち二人だけが書けば良いんです！ とか言ってきたが、無視した。そもそも俺は映画自体に興味が無い。アニメにも、ガーゴンにも。バカバカしい。

そう思って同好会メンバー三人から離れると、後ろから女子に声

をかけられた。後ろを振り返ると、右腕に無機質な、そして大きな杖を装着した香織さんがいた。

「さっきの映画の話なんだけど……」

聞いてたのか。

「私、見たいな！ 映画。……も、もちろん、刃人君が、良ければ、だけど……」

嘘だろおい何の差し金だよつかどうしてこんな積極的なんだよえー……

「この映画、気になってたけど一人で見に行く訳には、いかなくて……」

「が、ガーゴン、好き、なの？」

「う、うん……」

香織さんの少し赤らんだ顔を見てしまう。いや、何と言いますか……。細かいことはどうでも良いだろうと思う訳ですよ。ええ。……ええ！

御免被る発言から一分経ったかどうかで俺の発言がひっくり返り、メンバーに田中香織さんの名前が加わった。

「うん。真彦はどうでも良いってことでもう参加することになってるから。よろしく」

悠のこの発言に俺が心の中で舌打ちしたことは気づかれないようにしないとイケない。何と言っても香織さんの目の前だ。そうだ目の前だ。うん。

「あとは、瑠夢さんかな」

悠の行動力は舌を巻く領域だと思う。この積極性って何なんだろう。ちなみに瑠夢——るう、と読む。誰も初見で読めないことが一つの悩みらしい——は剣道部唯一の女子部員だ。

「皆でガーゴン！ 楽しみだなあ」
それだけかよ。

それから一週間後、映画を見に行くことになった。大盤振る舞いな割引があるような場所だ、規模も小さな、田舎の古ぼけた映画館、そして親子連ればかりの映画館に、高校生が八人群れをなして入る。異様な光景じゃ、ねえよな？

香織さんがいなかったらまず口をついて出ていたであろう文句の一つを心の中だけでつぶやく。制服を着ているでも無く、簡単にバレやしねえよ。誰に言うでも無く心で呟く。

映画自体は、まあ、あれだ。子供向けだ。うん。そこに色々言っただけで始まらねえ。ただ、

「そこだ！ 頑張れ！ ガーゴン！」

「立てー！ ガーゴン！」

「ガーゴン」

「それガーゴン！」

「頑張れ……頑張れ、ガーゴン……！！」

俺以外皆子供と一緒に大声あげてガーゴンの応援をするんだよな。これ、すつげえ不思議な気分だった。なんかこう、アーティストのライブとか行って、自分だけ専用の応援の振りを知らずに行っ

てしまつて浮く、みたいな。もしくは、夏休みの宿題を準備してたら周りが俺の知らない課題を提出しだす、みたいな。あーいう気持ち。あれだろ？ ここ、ガーゴンファンしか住んでない町なんだろう？ もうガーゴンファンしか住んでない町なんだろう？ もしくはあれか？ ガーゴンファンが住んでる町なんじゃね？

とりあえず映画って、静かに見るっていうのが最低限のルールなんじゃね？ っていうレポートを俺は提出したということだけ、最後に言っておきたいと思う。

(了)

雷の内部

る

だんだんか細くなってゆく未来も口で啞えてカस्ताネットの軽快なリズムで踊ってしまえば何もかも許されてしまうような夜に不意に訪れた不思議な瞬間は真つ昼間の草原に咲くたんぽぽみたいで私は永遠です、と言ってはみたものの狂ったように笑う女たちからしてみればそれはそれで狂っているってことになって、未来も電池切れのレーザーポインタが地球に寄り添いながら力尽きるみたいに、白けちゃったからソファーに横になってエレキギターと電子バイオリンが踊り狂う全ての人のどうしようもない心の隙間を埋め尽くそうとしているのを仙人みたいに見ていた。競馬で大勝ちした日ってのは夜の街を通り過ぎる女たちの頭上に値段がぼこんと浮かび上がってるのが見えて、そいつとオネンネするにはいくら払えばことたりるかかってのが瞬間的に分かっちゃったりするわけ

で、ちなみに脚がきれいなお姉さんってのはやっぱ相場が高いわけだ。とはいえ、借金取りがガチで怖いからコンビニのATMでアコムやらアイフルやらのカードを財布から取り出して十万単位で爆撃する、したら途絶えていた未来がぼつぼつと降り始めて掌を差し出すと冷たいけど皮膚を優しく愛撫するようにいつのまにか馴染んでいく。私が蹴りだした足の行方がたとえ真つ暗闇の路地裏で袋小路にぶち当たってもそれはそれでハッピースカイ、全ての人に平等に与えられた死をその時は喜んでフェラチオしようじゃないか。私が世界で最も愛していた曾祖母が病院のベッドで死ぬ前の人間がみんなそうであるように顔をパンパンにさせながらチューブを体中に巻きつけられている時、天井から黒い鉄の棒がゆっくりと下りてきて彼女の口の中に突き刺さろうとしていたのを見てから、死ぬってのはあの棒がゆっくりと口の中に突き刺さっていくものなんだなって知った。彼女に意識はなかったけど懸命にその黒い鉄の棒を吐き出そうとしている姿がどうにも惨めったらしくてさつさと病室を後にしたその時に体に纏わりついた慣性の法則が安アパートの一室を缶ビールの空き缶とタバコの吸殻で埋め尽くしている。

腐敗、つてのはオデュッセイアに出てくる求婚者に似ていて貞操たるペーネロペイアは私の脳みそのどこかの神殿で寝そべっていて、夫たるオデュッセウスを待ちながら一方ではそのどうしようもない腐敗に身を任せてしまいたいという願望を抱き続けている。そんな一人三役を演じながら今日という日だってチューニ

ングはフラットのまま、かなしい予感と幸せな瞬間を煮込んだ何となくマジカルなシチューを啜りながらオレンジのミニスカートに包まれたウェイトレスの奇跡的なお尻の揺れ方の法則について頬杖をつきながらいつまでも思いを巡らしているこの夜の始まりのウェットな時間。お尻ぺろぺろしたい。

私は生活のことを語らないのではなく、生活というものがないので語る術が無いってだけで、分かっているのはまだフェラチオの間には早すぎるってことで、今はただだんだん暗くなっていく夜の空とダイープなキッスを楽しみたいってこと。

脳みその機能のうちで一番重大なのは五感に伝達される膨大な情報の中から何が現実なのかを選択することに尽きるわけで、その様子は溢れかえる情報の中から確かなものを積み上げて一つの頂点を形作る、という意味において、私たちはとんがりコーンの先端部分で不自由なダンスをいつまでも踊り続けてゆく、ということに他ならず、ケミカルな作用で脳みその機能を揺さぶっても私たちはどこまでも現実のありかを知ってしまっているし、そうでなければ狂人だということ。私は両足で地面を踏みしめる、歩き出す、こける、立ち上がる。多分頭に詰めこまれたものが少しだけ重過ぎる、そういうリアル。

街のネオンに夜が馴染んできた頃、空は突如亀裂を生じてその内部が鮮やかに光った。遠雷はもったいぶった末にその音の轟きを差し出した。素敵なプレゼントをありがとう、その亀裂はピスタチオの殻のそのように思わせ振りの様子で視線を吸い込んでゆく、雷

の内部へ、何かしら神聖なものとして差し出されたものへと、それを娼婦のクリトリスと同等のものとして舐めるものたちをノーマルと呼んで丸く収まっている世界で、ピスタチオの殻を丁寧に剥ぎ取って中身を上品に召し上がる流儀で破綻無く進行していくあの素晴らしい世界に降り続ける黒い鉄の棒はどこまでも優しく、雷の内部で、光になっていったものたちを光のまま摘み取ってゆくのだろうか。とんがりコーンの先端を並べて、ほら、あそこまでは自由に歩けるよ、というやり口で、手と手を携えながら感じる永遠。ディズニールランドの手口で全てを招き入れる真つ昼間のたんぼぼ野原は悲しいほどに不可侵。それは消え去ってゆくものたちに素敵な私たちでさよなら、と手を振れなかったものたちへの報いとしてどこまでも眩しく、差し出されたピスタチオに触れることすら出来ずに佇むものたちを外部としてあくまで外部のままその光で包み込んでしまう。

ステータス欄にずらっと並んだ膨大な「私」と銘打たれた設定を延々とジョブチェンジし続けながら放浪する夜がかりそめの優しさを露呈してくれるのに任せて、私という設定は強い酒を呷り続ける。その傍に一人の女の子がいたっていい。パステルオレンジのワンピースに身を包んだ軽薄な女の子で、マクドナルドの流儀で顔に貼りついたスマイルが何か重大なことを隠していて、夜みたいにして私という異物もからから笑いながら飲み干してくれる。そんな女の子が。

そしてたくさんの夜を一緒に過ごす。もうほとんど見えなくなっ

たか細い糸を互いに縫い合わすような会話を続けて、夜に縫い合わされた私はもう完全にほつれながら、そこで初めて許された言葉で数篇の詩を紡ぐことが許されるだろうか？ 君はきつと優しく頷いてくれたり、言葉の意味を尋ねてくれたり、時には気紛れに涙を流してくれたりする。けど知っているだろうか、そのジョークみたいな涙でさえ驚くほど光に溢れていることを。そしてその涙を拭うには余りにも私の手は穢れていて。

女の子を置き去りにして飛び出した右足が踏みしめるアスファルトを貫く朝の光が怪物的な言葉でもって私を問いたです、お前の名は？ お前の意味は？ お前の向かう先は？ 私は「コケコッコ」と太陽にカモフラージュをかましながら、息も絶え絶えになって寝床に辿り着き、女の子の涙がその神聖さにおいて恐ろしいほど雷の内部と同じだということに驚愕し、もう一度それを思い描き、触れようとしては、それに触れることなど出来ないことに気付く。まるで指先と指先を合わせるとたちまちショートして焼け焦げになってしまふ恐怖から神に祈ることが出来なくなってしまうた最も信心深い修道女みたいに。私は穢れている。

ある時分、とんがりコーンの先端から滑り落ちた私は、夢の世界の招待人ファンタジアンと名乗る小太りの中年男と話をしていた。ファンタジアンはよく汗をかき男だったのだった。そのことバスタオルを渡すと、「これは、これは、あなたは本当に心の綺麗なお方だ」と誰に言うでもなく呟き、私はあの夜彼女の涙を拭えなかった手を見つめていた。ファンタジアンは実に合理的かつ嘲笑的

な男であったので、私が例えば天国のことについて話すと、彼はすぐさま天国というのはいわば混浴の露天風呂みたいなものですね、と言った。その後、やつらはおまけに潔癖症でしかも羞恥心が無いときてる、あなたのほうがよっぽど人間的だし、こういったらなんです「天国」というものに一番近いのも……と継ぎ足そうとしたが、混浴という言葉に興奮した私は、すぐさまかの男を玄関口から突き飛ばした、ファンタジアンはあーんと言いながら玄関の扉にその体を抉られながら視界の中から消えてなくなった。

その夜再び遠雷を見た、私はもう知っていた、私があの裂け目から生まれてきたことを、黒い鉄の棒はもう私の喉もとまで刺さっていた。部屋に戻って狂ったように泣き叫び、XVideosで大量のエロ動画を鑑賞し、もう幾分と黄ばんだ曾祖母の写真がある本の中から見つけた、葉にしていたのだった。それを幼い少年が憧れの女性の自転車のサドルを盗むときの慎ましきで取り出し、懐にしまった。そのままパチンコ店に行った、爆ヅキした。曾祖母の顔を指先で撫でた、精液を拭き忘れた手はカピカピになったあと、度重なった当たりの熱量によって染み出た汗と混じりながらぬめっていた。すると、彼女の表情は白い液体でほんのりぼやけながら何かを許すように微笑んで見せた、なんていうことはもちろんなくて、けれど私はそれでよかった。

「さよなら」って呟いて、いつまでも見つめていた。

(了)

其のX、真央。初恋・地獄篇

小野寺那仁

島内理紗は本祭の日も浴衣姿で来ることはない、と真央は踏んでいた。あくまでも祭りに参加しようとはしない。冷たい無機質なレズを通してこの雑踏のエネルギーを汲み取るつもりなんだろう。何年かぶりに水玉模様の浴衣に袖を通すと羞恥心も蘇る。家の中では家族がもの珍しさからじろじろと眺められたのが気になった。とうとうおかしくなったのかと思われたのかもしれない。一連の復讐がことごとく失敗していたこともあって今度こそはうまくやりたい、なんとかして島内理紗の惨めな姿を村の人たちに知らしめたいと思ったが、まだうまくいり方が思いつかない。

家を出て神社の境内に向かう。宿場町の軒が途切れてから先は、石畳の曲がりくねった古道が続いている。首のない斬られ地蔵が三体、夏草にうずもれている。その細い道を近隣から集まってきた見

物客や遠来の観光客に混じって真央は歩く。にぎやかな声がそこかしこにこだまする。祭囃子が遠くから聴こえてくる。老いた人にはつらいようであちこちから不満の声が漏れてくる。振り返れば足元には宿場町が見渡せられ、遠くには山脈が連なり街の周囲は緑の苑が広がっていた。夏の陽射しは徐々に掻き消されて影へと変わっていく。真央には珍しくもなんともないのだが、観光客たちはいちいち振り返ったり立ち止まったりするものだから歩調を合わせざるを得ない。

息を弾ませて鳥居をくぐると観光客たちはやや拍子抜けする。右手には舗装された新道があり、車が往来している。駐車できる場所に限られているので停車して人を降ろすとまた戻っていく。露天商のワゴンや消防車など許可された車両が停まっている。

さっそく境内を舐めるように見回し理紗を探す。焦燥は頂点に達し、ふつふつと込み上げてくるものがあった。祭りの興奮状態が真央の気分を昂揚させていた。まるで山姥の命を受けたように理紗への復讐心がこの場所へと導いてきたのだ。そう感じたのはまさにその時に若衆の笛の音は「山姥の唄」であったからだ。

山姥の唄は哀切を伴った鎮魂の唄だった。

真央の高校生の時、物好きな他県出身の女教師が伝説の詳細を調査しようと思いつき、生徒たちを使って、神社や寺院に残る古文書を調べたりした。だが、記録は何も残っていない。そのうちによく八十過ぎた老人から話を訊きだすことが出来た。

山姥は姥捨てに失敗したある老婆だと言うのだ。数日後、猟師は

強靱な老婆を猟銃で撃ちそこない追いかけろうち、老婆の拵えた落とし穴に嵌って、竹を尖らせた幾本かの槍が突き立てられていたために猪や他の動物同様に惨殺されたということだった。しかも猟銃も奪われた。それから数カ月の間は山に近づく旅人達が猟銃で脅されて金品や衣類を奪われた。何度か村に懇願して山姥との戦争を持ちかけたが、古老たちは反対した。表向きの理由は、村人の困窮のために負担はかけられない、地形に知悉した山姥に勝利するのは難しくこれ以上の犠牲者は防ぎたい。裏向きの理由としては、何と云っても山姥と化してもほとんどの家の親戚筋、あるいは幼女の頃からの知人であってそれを征伐するにはあまりに忍びない。姥捨ての風習自体が冷酷非道なものである。猟銃で撃つたのはそもそも姥捨てルールに違反したもので、畏にかかって死んだのも殺人でなく事故であり、猟師が畏にかかるのは恥だとか、正当防衛とかという声もあった。古老たちが喜んだのは事件をきっかけに姥捨て廃止の機運が高まり自分たちの待遇も変わり、目前に迫っていた姥捨ての日が解消されたことにあった。それからというものの山姥の祟りを懼れて神社の賽銭箱の脇に貧しい中から団子や粟やコメを置いていく者が増えていった。けして村人は憎悪しているわけではなくあなたに同情しているという意味の鎮魂曲がつけられてはじめてのうちはおそろおそろ必死で唄われたということだ。それはそうだ。ひとりお逆者がひとつの村を滅亡させることは、実はそれほど難しいことではない。川から毒物を流したり家々を焼き払ったり散弾銃で撃ちまくるなどされたらひとたまりもないではないか。その人は山姥

の末路については知らなかった。あたかもいつまでも生存し続けたかのような話だった。

真相はつまびらかではない。犠牲者の猟師の妻は苦労したので怨念混じりに孫に聴かせてそれが代々語り継がれて、直接関係のない人々はいっしか忘れ去り、都合の悪いことなので記録には残されなかったようである。

結局、女教師は公に調査結果を発表することはしなかった。古老の話は後世の作り話めいていて信憑性に欠けるし裏付けになる証拠に乏しい。話としても陰惨で生徒に広めるには教育的な価値があるとは思えなかった。観光パンフレットに掲載するにはマイナスイメージになりかねないと判断したので、たまたま記録者のひとりだった真央にも記録を廃棄するように求めてきた。言われるままに真央は封印したが記憶としては残った。その時は、気にも留めなかったが、物悲しい調べを聴くと他人事とも思えない。もはや人ではなかったかもしれないが。気分を落ち着けるためにメンソールを吸い込むと氷片が咽頭から肺へとまっしぐらに駆け廻り初めて快感を味わった。

宵闇が迫り、町内を練り歩いていた山車が戻ってくる。大太鼓が破れんばかりに打ち鳴らされる。若衆は一升瓶を抱えてラッパ呑みしている。社殿の前に山と積まれた樽酒が次々に蓋を割られて、誰かれもなく振る舞われる。すっかり酔いが回って足取りの覚束ない男もいる。真央は差し出された升を一気に干した。宮司が近寄ってきた。真央は慌てて、何気なく吸殻を捨てて足で踏みつけた。気づ

いた人の何人かは眉を顰めた。

「清造さんの娘さんじゃないか。まあ何とも珍しい。民子さんとはしょっちゅう話してるんだが、あなたは東京に行ってるものだと思うってました、祭りだから帰ってきたの？」

「ええ、まあ」真央は俯いた。宮司は探るように覗くので化粧の薄い真央は恥ずかしく思った。

「そういえば、あの時以来ですね。あなたがまだ高校生だった頃。あなたは山姥伝説について調べていた。担任の、何ていう方だったかな。あの人。すぐに退職してしまわれましたね」

「私も忘れてしまいました。あつ、伝説について訊きに来たのは覚えてます。でも何を教わったのか、ちつとも覚えていない」真央は笑った。数年ぶりに笑った気がした。

「相変らず笑顔の素晴らしい御嬢さんですね」

「えっ」六十過ぎの男に云われても動揺することはないのだが世間と言うのはわからないものだと思った。

「覚えていないのも何も私は何も語っていませんよ。語るべきではないと思いましたがね。山姥の顛末はそれほど悲劇的。あなたが調べ上げた姥捨てに失敗した或る老婆が山姥に化したというのは事実なんでしょうね。でも記録には残っていません。この境内にお供えものを捧げて山姥の怒りを鎮め山姥の延命を図ったのも確かです。そのまま冬になれば息絶えてしまうだろうと思ったのです。赦しを願う文書を供え物に添えて、また共に暮らそうと提案もされましたが、山姥は猟師を殺めてます、旅人を襲撃すること

数知れず様々な悪事にも手を染めてしまっていたから応じるわけにもいかず、そもそも文字が読めたのかも定かではない。もはや人ではなくなっていたと言っても過言ではない」

「宮司さん。あたしはすっかり変わってしまったんですよ。もう山姥伝説について調べてるわけじゃありません。それに……」

「それに？」

「あの時に話せなかったことをどうして今になって話そうとするのですか？」

「それは失礼しました。そんな話を聞かせたらあなたが村を嫌いになつて何処か他所の土地へ行ってしまうような気がしたのです」

「ああ、そういうことですか。それなら構わないです。あの時は何も考えていませんでしたが、今はあたしは村が嫌い、村人たちと話すこともなく明日にでも他の土地に行つてしまいたいと思つてるくらいですから！」

「そうなんですか。それは残念でなりません。でも仕方ないですね。村にはあなたと同じ年頃の娘はほとんど残っていませんからね。それなら山姥の顛末について語るのは止しましょう。気持ちいいこともないでしょうし。また気が向いた時にでもお話ししましょう。あそこに小屋があるでしょう。あの小屋は再建されたもので当時のものではないですが、あそこにしばらく山姥が住まっていたという言い伝えもあります。冬の寒さを逃れるように村人たちが造ったんでしょうね。それも言い忘れてました」

自分は知りたかったのだろうか。いや話を遮つたのだから知りた

くはなかったのだろう。どのみち悲惨な最期だったに違いない。家には祖父もいたが婿養子だったので彼は余所者で村人との付き合いが少なかった。元はと言えば復員兵だった。

何人かの神社世話役が宮司をせかすように社殿へと連れ去っていった。辺りはすっかり暗くなり篝火だけが明るく燃えていた。人だかりは目に見えて増えてきて社殿の前はびっしりと人で埋め尽くされた。理紗を見つけるのも難しい。真央は自由に動き回ることもできない。険しい山を切り開いた神社なので社殿前の広場は狭かった。車座に人々は思い思いに自分の敷地を確保し始めている。鳥居から参道までの石段あたりはもう先に進めないのにどんどんと人が集まってくる。並んだ露店の周囲にも人が溢れてきた。想定を超えた人手のようで神社世話役たちはトラロープを花火の打ち上げ台や手筒の周囲に幾重にも張らざるを得なくなった。社殿の背後の林にも人々は入り込んだ。クスノキの大木には子供たちが攀じ登った。人々は暑いだの早くやれだの勝手なことを口走る。狭い村にこんな人がいるはずはないのでほとんど九割くらいは何処からか押し寄せた観光客か花火マニアに違いなかった。駐在や消防の数が圧倒的に足りずにハンドマイクで「危険だからさがってください」と声を漕らして叫んでいる。

酒が廻ってきたのと人いきれで暑くてたまらない。和太鼓の音が煩わしい。真央は社殿の脇に立っていたがあまりに暑くて林の中へと入っていく。そこには人はあまりいない。梢で花火がよく見えなからだろう。そこからは神社内部がよく見渡せる。神妙な面持ち

で竹笛を吹いているのはやや滑稽だった。かわいらしい少年たちもこの時ばかりは絆纏をまとって現れ、親たちが拍手喝采する。巫女はまだ小学生ではなかるうか。希望者か厄年の人たちか、お祓いを受けている。さきほどの宮司が出てきて祝詞をあげる。

「あら真央じゃない」

髪を茶色に染めた女と眼が合うと間髪いれずに話しかけてきた。彼女の手はまだヨチヨチ歩きの幼児に繋がっていた。子供を挟むように精悍な男が寄り添っていた。思いのほか童顔だった。真央は咄嗟には思い出せなかった。会釈するとしばらく一方的に話した。話しているも誰だったのか思い出せない。女は尚も話そうとするがいちいち自分の近況を話さなくてはいけなくなるので手短かに切り上げた。

「待ち合わせがあるからもう行くわね。坊やが踏みつけられないように気を付けてね」

「ホント、そうよね」

テンポの速い曲に変化していた。手際よく進行していく。いよいよ手筒花火がワゴンボックスから運び出されて準備される。

一眼レフを構えた島内理紗を見つけた。真央はほくそ笑んだ。良いポジションを取るのが仕事であり、かなり若衆に接近してくるのは予想できたことだった。若衆が理紗に気づいてふざけたポーズを取っているが、笑顔で愛想は振りまくもののシャッターは切らずレンズは別の方を向いている。

真央は理紗に残り十メートルくらいまで接近したものの、人垣に

阻まれて理紗を視界にとどめておくのも難しくなってくる。

平成の大合併でこの村は村ではなくなつた。山ばかりであるが一応は市ということになる。同時期に幾つかの集落が祭りを行うので市長はいちいちは現れない。代わりに区長（もともとは村長だった）である美作栄治氏と神官が簡単な挨拶をしているようであった。というのもマイクを使つていてもその声は群衆の声にかき消されてほとんど伝わつてこなかつたからである。消防署員も何人かはいるが、やはり各地区に分散しているために担当は村の消防団が大勢を占めている。消防団員は花火を担当する若衆が主力であるから消防の法被を着て居並んでいるのはOBである。彼らがあらかじめ備え付けられている打ち上げ花火の発射台近くに消火用の水のはいつたバケツを運んでいた。業者もいるし、不慣れな手筒を操るのを教えてくれた遠い他県の人たちもいる。署員からの注意事項の説明もあつたが、区長の声よりも遙かにかぼそくて何を言っているのだからほとんど聞き取れなかつた。理紗は市の広報誌からも頼まれてるのか、神社の儀式や村の行事なども撮影していた。数日前から村人たちのひとりひとりを撮影し、ここでは消防からゆきずりの観光客までなんでもかんでも写していた。そのカメラの先を追うとひとりの消防署員が目飛び込んできた。ヘルメットを外した男は丸刈りの逞しい男だった。柔和で端正な顔立ちが歌舞伎役者に似ていないこともない。真央は理紗に無性に嫉妬し始めていた。やがて理紗は彼に近寄つて何やら言葉を交わしているではないか。眼を凝らしても彼の名札は見えない。真央は理紗は彼を好きなのに違いないのだと

思い込んだ。若衆に対応するときとはまるで違っている。さらに接近していく。人混みをかき分ける。何人か押しつけた。子供を突き飛ばしたような気がした。彼をもっと近くで感じてみたいと思つた。どうして、ときめいているのだろうか。いや、これは理紗が彼と親しくなるような予感のなせる業でそれをなんとか阻止したいのだ、或いは、理紗が真央の失態を撮影した写真を彼と二人で嘲笑するのも防ぎたい、とかいろいろと想いを巡らせているが、なんだか、もつともつと純粹な感情でもあつたような気がするのだ。遙か昔には持つていた、誰に対して抱いたのかすっかり忘れてしまつたが、わくわくするような感触が蘇つてきたのだつた。

真央が彼の目の前に立ちはだかつた時、彼は目を丸くした。同時に理紗の顔にも突如現れた闖入者に戸惑いの表情を浮かんでいたが、真央は気づかない。

彼の首からぶら下げている名札を一瞥で読み取る。むらかみたくや。

「あら、たくやクン。お久しぶり！」真央は、彼に抱きつくようにしがみつくど化粧の薄いのも忘れて、顔を彼に近づけた。

「やあ、お久しぶりですね」と言いつつ、村上は身体をゆつくりと引き離れた。きつと村上の頭の中は遙か以前の同級生か、キャバクラ嬢のひとりか、署の宴席のパーティーコンパニオンの誰かか、あるいは最悪の場合は、彼の元彼女の変容を遂げた姿かと思ひ巡らせているに違いない。だが村上は悪い気はしなかつた。真央は美しいとは言えないが、表情が異様に輝いていて何らかの真実味を感じさ

せるには十分であったからだ。だから以前の知り合いだろうと納得したようであった。また危険な人物でもない。

「今はどちらにお勤めなの？」

「新島支所に去年から配属です」

それだけ訊きだせば充分だった。村上是「誰だろうか？」と疑問を抱きつつ会話をつなぎ理紗には微塵も関心を払わなくなっていた。やがて第一弾の打ちあげ花火に点火が始まり轟音と共に夜空に光の大輪を開いたので、村上是慌ててヘルメットを被り、自分の持ち場へと向かって行った。

「また、のちほど」

「ええ、絶対ね！」思いがけない言葉だった。ついに道は開かれたのだった。極彩色の光や色をまぶたに焼き付けるほど見つめ続けた。

「絶対に手に入れる」

隣に立っている理紗は今度は大輪を撮るのに夢中になっている。

「あなたね。あの写真消したでしょうね？ デジタルカメラなんですよ？ 意味ない写真は消すよね」真央は訊く。

「だいたいあなた誰？」

「壊れた日傘。覚えてない？」

「ああ、ああ、あの時の」

理紗はこちらを見ずに受け答える。今度は観客の、特に子供たちの表情を追っているようだ。

「ああいうのも面白いんじゃないの？ もちろん残してあるわよ。見たいの？」

「だから私が納得しない写真をあなたはどのようにして所持してるの？ 肖像権の侵害でしょ」

「私は決定的な瞬間が好きなの。中年の小太りな女が不似合いなハイヒールを履いてひっくりかえった。面白いじゃないの。そういうなら表現の自由の侵害ね。だいいち、あなたの顔が映ってないから誰だかわからないはずよ」

「まあ、なんて人なんでしょ！」

「そういえばあなたの写真ってなかったと思うわ。脚だけなんて気の毒だから、一枚撮ってあげようか？」

「いらないわよ。そんなもの。こんな田舎で生活してる人もいる！ みたいな偽善的な写真集でも作るんですよ。あなたの事、ネットで調べたわよ。なんで私たちはタダであんたの金儲けの道具にならないきゃならないの？ 都会の女に撮影してもらったって喜んでるのはモテない若衆くらいじゃないの」

「ああ、ああ、そうですか。どんなところにもひとりやふたりはいるわね、あんたみたいな天邪鬼が。そんなの気にしてたらこの仕事は勤まらない」

「おまけに元彼にまで手を出そうとしてさ！」

ぐしゃりとハイヒールで何かを踏みつけた気がした。

「あ、あたし、何にもしてない」強気な態度が影を潜めた。明らかに動揺してこちらを見ている。それから真央はねちねちと理紗を言葉で責め続けたが、何を言っても理紗は振り返らず反応しない。やがて人ごみに紛れて理紗の姿を見失なった。

みな二年ぶりの花火にうっとりとしていた。花火自体は都会の花火大会に比較するとちやちなものだが、打ち上げ台から離れていないから迫力が違う。もし都会だったら数万円も支払わないと見られないような特等の場所でもあるのだ。ひと通り通常の花火が打ち上げられると次はいよいよ手筒に移る。竹を細工した花火は若衆自身の手で作られたと説明がされる。もちろん、専門の人々の指導によるものなので安全と思われるが万が一を考えてあまり手筒には近づかないでほしいと付け加えられた。人々に緊張が走りやや後ずさりした。トラロープはますます押された。押しではダメと世話役が慌てて注意する。子供の何人かが若衆の周囲を走り回っている。するとまた理紗が悠然と歩いているのが見えた。誰も注意しない。

若衆の何人かがふらふらとしている。「では、はるばる他県よりお越しいただき御指導いただきましたオコゼ組の方々の模範演技を見てもらいます！」とアナウンスがあり、おおっと歓声がかたました。ちよろちよると初めは小さな火であったが芯に到達すると凄まじい火柱が立ち上がって炎と火の粉で何も見えなくなった。次々に点火された。三本の火柱が十メートルを超え、境内は真昼の様に明るくなって、ロープの辺りには火の粉が降り注ぐ。真央自身も火の粉を被らないように思わず人の方へと身を振る。そうしたちよっとした動作が波のように伝わっていき、もっと近くで観たい人と火の粉に危険を感じた人との間で反対の動きになっていた。ちよると真ん中あたりにいる人は両方からの圧力で潰されそうになり誰だろが構わずに踏みつけにして人の肩によじ登って難を逃れ

ようとしていた。大人ばかりでなく子供までも「あぶない」と叫んでいる。だが、多少の危険は付き物なのでオコゼ組はおどけてそのまま続けた。怖がる観客に意図的に火の粉が降るように手筒を傾けて、きやあきやあと騒ぐのを楽しんだりしていた。

ようやく模範が終わると人々は安心した。それでいったんは後方に後ずさりした場所から一気に数メートルも前に押し出された。花火が始まってからやって来た人たちもいるのでさらに人は増えている。

若衆は既にできあがっているのにさらに一升瓶から酒を仰いでいる。法被を脱いで禪姿になった。同じような格好のオコゼ組の人々と比較するとボディビルダーとニートほどにも筋肉の付き方が違っていて間近で見ている人たちの失笑を誘った。オコゼ組は彼らの足元が覚束ないのに不安になってきたのか、怒声を浴びせかけて、もっと前で、とか社殿に近すぎる、とかロープを後方にしないといけない、とか叫んでいた。ひとりずつやれ！と言う。それで俺たちがサポートするから。人が多すぎて危険だ。でも聡を先頭にやんちゃな若衆は飲んでいることもあって真っ赤になって反発している。何を叫んでいるのかわからない。練習の時は素面だったのだ。聡は大声で叫ぶ。良いカッコがしたいのだ。

「三人一緒にやる！」「ばか聡め！」かつて私的に勉強を教えていた真央は小声で呟く。

オコゼ組がすぐ下で待ち構えるという姿で若衆はしぶしぶ納得して同じように三人が登場した。観衆は不安のなかで喝采した。点

火するといきなりだった。十メートルの火柱が立つか立たないかのうちに聴はよろけて観客の方に傾けてしまった。それは意図的ではなかった。衝撃に耐えられなかったからだ。かろうじて観客への直接噴射は免れたが至近距離で火花を浴びて、不安の中した観客たちは喚きながら一氣に後方へと逃げた。さきほどの数倍の力で。あの二人も何処へ噴射するかわからない火柱を持つてよろよろとしている。オコゼ組たちは聴を集中してサポートした。すると一人がとうとう手筒をまともに観客に噴射したのだからたまらない。人々は逃げ惑い全力で後方へと進んだ。次から次へと後方の人々も波のように逃げ惑った。或る人々は屋台に突っ込む形になった。たこ焼き屋やお面の店は吹っ飛んだ。香具師たちは怒りを露わにして防ごうとしたがとても無理でとうとう屋台は潰され、火の着いたコンロがひっくりかえり幾つかが出火した。バーナーがテントに引火してしまったのだ。すぐさま消防がサイレンを鳴らす。境内は混乱してパニック状態になった。今度は空いている社殿前や社殿の後ろの林に向かって人々が突進してきた。水を掛けようとしていた世話役たちは散りぢりになった。横になった手筒は勇敢な何人かの観客がはいたり蹴ったりしてようやく鎮火したが、残る二本は社殿の直ぐ脇にまで後退せざるを得ずオコゼ組たちが火を消すころには相当の火の粉を藁葺屋根に噴射したあとだった。不安に駆られておそるおそる関係者が社殿を眺めていると花火の火が消えたのにまだ明るく、宵闇を焦がしはじめてるのが見えた。埃を燃やしているような臭いが漂う。屋台の消火に消防本隊と団員は向かっている。

人々はどうしていいのかわからず社殿の周りに集まってくる。花火見物は火事見物に変わった。だが、まだそれに気が付いている人は僅かであった。それにすぐに消火できると思っていた。屋台のテントは燃え広がっており鳥居の辺りは真っ赤に染まっていた。社殿の周りの人々は神社入り口の火事を眺めて騒いでいた。真央は押し潰されそうになりながらようやく社殿に辿り着きほうほうのいで他の人たちと共に賽銭箱の隣りで休んでいた。神社世話役たちは巫女たちに帰りなさいと指示している。世話役の何人かが集まって、花火は中止ということが短い談議で決まった。

中止と言うことが正式に告げられ、子供連れなど身の危険を感じた人たちがようやく帰り始めた。何人か怪我人が出たようで担架も持ち出され救急車のサイレンも鳴り響く。今頃になって半鐘が割れんばかりに打ち鳴らされた。

屋台の火は消防が消し止めた頃、裏山の子供たちが転がるように降りてきて社殿の屋根が燃えていると言いだめるのだ。観客のほとんどが社殿の方を指さして燃えていると口々に叫んでいるではないか。今度は社殿内部がパニックになった。はしごが駆けられ若衆たちがバケツを持って屋根に向かって様子を見に行く。だが、既に遅かった。バケツの水くらいでは焼け石に水だった。社殿にはほとんど誰もいなくなった頃にも真央はいた。目の前で相変わらず目を輝かせて今度は報道写真を撮影している理紗。こいつは狂っている。真央は思った。真央が残っているのは、消防士の村上の活躍が見たいからだ。ライバルがここにいるのだから引くわけにはいかない。

社殿内部の温度が上昇する。消防車は人で身動きができない。ホースを伸ばしているのはわかる。とうとう屋根が抜け落ち火が落ちてきた。中空が見える。誰もいないだろうと思っていたら宮司が奥で何かごそごそとしている。真央は奥に入り声を掛ける。「何してるのですか？焼け死にますよ」

「もうダメだろうか。神体だけでも持ち出そうかって思ってた。全部燃えるってことはないと思うが、重くてひとりでは動かないから手伝ってもらえないか」

祭壇の奥の奥まで入り込むと木簡のようなものに草仮名で意味不明の言葉が綴られている。小さな木箱だった。中を開けると破れて腐り掛けている巻物が出てきた。

「これ？ なんですか。わかりました。早く逃げましょう」

「この神社は末端だからたいしたものはないがなあ。そうそう、こっちだぞ。重いのは」黒々とした葛籠はびくともしないくらい重い。蓋をしておけば燃えないんじゃないのだろうかと思う。

「この際だからいいことを教えよう。ここにいるのは山姥なんじゃ」

「……嘘」

「開けてみて確認したらどうだ、自分の眼で。わたしが許可する」真央はおそろおそろの蓋を取る。眩暈のする異臭が漂う。数十年も前の空気なんだ、と真央は思う。セルロイドが溶けたような茶色と黒の樹脂に固められている。手足などは小熊の掌のように小さくて何が何か分からない。顔は茶色くムンクの「叫び」のようにほとんどが口で占められている大きな穴が開いているだけだった。眼球は

あったのだがそれはすぐにガラス玉だと分かった。

「こんなの猿の剥製にガラス玉を埋め込んだだけじゃない。狒狒なんですよ」

全長は八十センチほどだ。いつのまにか真央にくつついてきた理紗は写真を撮影する。「よせ」宮司は制止した。

「あんた天罰がくだるぞ」理紗は奇妙な微笑を浮かべている。

「これは誰にも秘密なんじゃ」神官でさえ知らないようだった。宮司は理紗に飛びかかり捕まえ羽交い絞めにした。真央は理紗の手からカメラを奪い取って、憎しみを込めて何度も叩き付けて破壊した。「用はないんだからさっさと帰れ」宮司は理紗を離して吐き捨てた。理紗は、カメラを回収することもせずに茫然として立ち去った。

「山姥って狒狒だったんですか。大猿ですよ」

「君はあの時心の底から山姥を悼み、姥捨ての風習の不条理を感じていたんじゃないのか。少なくとも私にはそう見えた。投げやりになつたり諦めたりしてはいけない」

「ううん」真央は考え込んだ。

理紗ほどではないにしろ、あたしも理紗に近くなっているということだろうか？

「本当にこれを持ち出すんですか？ びくともしませんよ」

「ではこれでくるもう」敷いてあった莫塵を丸めてふたりは山姥をくるんだ。乾燥しきっていた。危うくバラバラになってしまふところだった。

「わたしの聞いたところではこれはやっぱり人間のミイラなんだ

よ。先代の宮司から聞いた。誰にも話してはならない」

祭壇の天井が破れて火の塊が落ちてくる。どのみち外へは持ち出せない、社殿の前方には炎が駆け廻り燃え盛っていた。数人の人々が真央たちに気付いて早く逃げろと声を漕らして必死に呼びかけている。全体が倒壊するぞと怒鳴っている。

「ありやあ」人々はまたパニックに陥っていた。

一部が焼け落ちて崩落を始める頃に放水がようやく開始された。真つ先に飛び込んできた黒い影は消防署員の村上だった。彼の瞳は強い使命感を帯びていた。

「ここで死ぬのは勘弁してほしい」真央は言った。

「裏だ、裏木戸を破ればすぐ外に出られる」

「いえ、裏もちよっと燃えているんですけど」

村上は僅か数秒で祭壇まで辿り着く。

黒い人影が炎の中に見えた。近くなる。防火服に守られた村上だった。

「何をしてるのですか？あ、あなたはさっきの」

「神体を避難させようと思って」

「そんなことしてる場合ではない。もう一挙に倒壊しますよ。死ぬんですよ！三人とも」

村上は山姥を抱えて炎の中に葬った。

眼にもとまらぬ速さで真央を抱きかかえると炎の中を戻っていく。

「着いて来て」宮司もよろよろと後に従った。

「責任をとって死のうと思っていたんじゃないんですか。でも御嬢さんを道連れにするのはよくないでしょう」

「いやそんなことは断じて思っていない」

真央は失神するかのようなエクスタシーを感じた。もしこのまま焼け死んでも構わないのではないかと。このままの状態が続いたらどんなに幸福かしないだろう。男の逞しい腕に抱かれるのは初めてだったから。業火に焼かれて村上の腕と真央の脚とがくつついてしまうのを望んだ。何か痕跡がほしい。

宮司の背中には炎が巡っていたから、助かってしばらくのたうちまわっていた。人々がバケツの水を何度もかけて冷やした。世話役たちが何か尋ねようとすると、

「ああ、言うな、何も言うな、何も聞かなくてくれ。わたしが悪かった」苦しみながら宮司は嘆願する。

真央は涙にむせいでいた。立ち上がって村上の顔を見ながらありったけの力を込めて抱きしめた。人びとは興奮して村上の勇気を賞賛していた。顔を赤らめていた。

「いえ、私は職務を遂行したからですから」

そういつて彼が振り返ると建物の柱はぐしやりと折れ曲がって中央から陥没して倒壊した。

「あの黒い塊って何だろう」村上は真央に訊いた。

「宮司さんが命をかけて守ろうとしたものです、それを私も手伝ったのですが、それを知りたことも冒流になるのではないのでしょうか。」

だから神体なんです」

「そんな大切なものを私は燃やしてしまった」村上は漠然とした災厄の予兆を感じているのだろうか。

「いえ、知らなければいいんですよ。人びとの守り神を明らかにすることが罪ならばあなたのしたことは闇に葬るという点では善なのです」

「いや神体はここにあるから大丈夫だ」宮司は懐から巻物を取り出す。人びとはそういうことかと納得する。真央が激しい痛みを腕に感じて浴衣を捲り上げると数センチの皮膚が焼け焦げていたのだ。村上が心配して手を差しのばした。小指のリングが禍々しい光を放った。

(了)

横を向いたまま

日居月諸

教室の後ろのドアが開いて、クラスに馴染みの薄い教師が入ってきたかと思うと、担任に軽く会釈して窓際へと進んでいく。その唇が硬く結ばれているものだから、生徒たちはざわつきも出来ずに、音も立てない足取りを見守っていた。

教師が後ろから二番目の女生徒に声を掛けると、彼女だけが皆と同じ方を向きながらも瞳を震わせていたのだと気付いた。耳元でぼつりと何かを伝えられると、瞳は固まり、目は見開かれ、顎が上があった。眉が強ばり口元が手で覆われるのに従い、教師は集まる視線から庇うように彼女の肩を抱いて、椅子から立ちあがらせた。

二つの背中が後ろのドアへと歩いていく間、残された生徒たちは背中しか追うことが出来ず、ぴしやりとドアが閉じられた後も沈黙は続いた。銘々が今まで自分が黙りこくっていたのだと気付くと、お互いの顔を見合わせ、時々ドアへと目を配りつつ、ひそひそと声

を交わし始めた。

しきりにまたたくそれぞれの瞳は目の前の瞳をしつかりと捉えられず、相手もそうなのだと思付くと、動揺は広がる。口ぶりも上ずって、会話は成り立たない。このままでは誰もが自分の在り処がわからなくなってしまうのではないかと思われた時、破裂するような音がひびき、皆の注目が向けられた。そこには担任がいる。したたかに叩いたと思われる掌は広げられたまま教卓に乗せられ、その瞳はひとところに固まっていた。

大伯母が亡くなったと聞かされて、即座に学生の頃の記憶を思い返した。後でわかったところによると、あの時彼女の祖母が亡くなったのだという。女子よりも男子との付き合いが良く、他人の肩を叩いてあげすけに笑うことの多かった彼女が、思いがけず泣き顔を見せた。そんな珍しさもあるが、祖母の死を聞かされて、一瞬震えていた瞳が固まったのを、後ろの席からありありと見てしまったのか、薄々折りこみが済んでいたけれど、受け止めきれなかったのか、受け止めきれないでいたところに、トドメを刺されたのか。

訃報に接した時、私もそんな一呼吸をおいた。けれど涙は浮いてこなかった。傘寿にも届こうかというのに手が鈍るからといって朝早くから炊事を続けていたらしい大伯母が、死んでしまった。折りこんでいたことが裏切られて、どうしたらいいものかわからなくなった。泣けない自分に気付いて、なおのこと手に余った。

小学校を出て坂をくだる際、億劫になると大伯母を頼って、時には泊めてもらっていた。老婆と子ども三人が囲む食卓で聞かされた

様々な昔話は、今もよく覚えている。成人してから数年ほどして亡くなったという二人目の妹は、縁談がまとまった後すぐに、病を患った。五人兄弟の末っ子で、下から見上げるしかなかったせいかわ度がうまく、特に恋心の芽生えに目ざとかった。夜更けに帰ってきた下の兄が、しばしばうつむくの気付くと、きつとニヤケ顔を隠そうとしているのだと暴いて、一晚のあいだ相手の素性を根掘り葉掘り無邪気に問い詰めていた。そんな妹によりやく意趣返しが出来ると、兄弟たちは見合いの席に押し寄せるほどに浮き立っていたのだが、間もなく病の診立てを告げられた。まわりの雰囲気に入りこめる子がノボせた空気にアテられたのだから、ともかくあの時は因果を感じた、嫁に行く時はひそやかにやることだね、紗江ちゃんはある子に似ているから……皺ばんだ横顔だけを見せて、大伯母は独り言のように話していた。

坂をのぼらなくなつてからは昔話を聞くこともなくなつたが、家の屋根越しに小学校の校舎を見上げると、大伯母の横顔が浮かんだ。顎をあげるにつれて背まで小さくなって、隣にはハトコたちが現れ、三人で昔話に耳を傾けている頃に戻った気分になる。体の奥深くまで、大伯母は見上げればそこにいるのだと染みついていっているものだから、亡くなったのだと知らされても、首を傾げるほかなかつた。死に水というのは脱脂綿で口を潤してあげることなのだという。社会人になつたというのに葬式にも参列したことがなかつたので、母の話で初めて知つた。病によることもなく息を引き取つた唇は、水を弾くほどだつたそう。その頃会社にいた私は、母や遺族が見

せたという涙に立ちあうことは出来なかつた。

姉を失つたことになる祖父は、いつもと変わりない、唇をかるく結んだ仏頂面をしていた。夕食を囲むと一週間に一回の、やらなければ気が済まないと言っても言うような深酒を慣れた手つきであおつた後、風呂にも入らずに寝転んでしまった。炬燵に潜りこんでしまったものだから父が担ぎあげなければならず、祖母が布団を敷いて、母が着替えを用意した。

檀家の元締めじみた役目を負っているので訃報には年中接しているせいか、帰ってきて喪服から着替えると、いつも居間にごろりと寝転んでしまう。疲れたという様子でもない。堂々といびきをかいて、いつせいでいいとでも言いだしそうなくらい、悠々としている。それを祖母や母が、いつも世話する。

どこかで折りこんでいたのでしようよ、と溜息をつく母の顔は少しほころんでいて、むしろ人心地につかせてくれた有難味を感じているようでもあつた。私もまた、仰向いてほぐれきつた赤ら顔を見ている内に、ああいう吊い方もあるのだと自らの身がようやく落ちていた気になつた。

だけど通夜を迎え、喪服をそつなく整えている祖父の姿を見ていると、以前はそんな動じなさに首を傾げていたものだと思ひ当たつて、落ち着いた心地は失せてしまった。最後に喪服を着ていったのはいつだったか、いつのことにせよ、普段は目につかない黒いネクタイやら数珠やらの在り処をいともたやすく探りだし、祖母や母の手を借りることなくフクサを包んでみせるので、いちいち手順を確

かめなければいけないこちらが場違いに思えてくる。礼儀にまで上り詰めそうな手際良さを追っていると、ほぐれきった仰向けの姿でさえ型通りの振る舞いに数えられる気がしてきた。

あの子は一日だけ忌引で欠席して、といつしか学生の頃へと思いが至り、あれ以後は気さくな姿を取り戻していた覚えしかない、けれど、立ち直るまでにまた一呼吸が置かれはしなかったのだろうか、と今になって探る手が伸びていった。

坂をのぼって境内に至るとすでに人は集まっていて、あちこちで白い息を立ちのぼらせながら旧交を温めていた。祖父は隣町からやってきた弟や妹たちと話し合い、祖母と母は本堂に入って喪主に対する挨拶へと向かった。婿である父は入口の前で立ちすくんだきり、煙草をくわえて、青白んだ頬をすぼませながら空を見ている。煙が立ちのぼっていく先には月も見えず、雪が降りそうだな、と父はつぶやいたが、かといって困るといった様子でもなく、灰が唇の先から落ちるのにまかせていた。

私も、初めこそ背が大きくなったという月並みの旧交を確かめる言葉を掛けられたが、自分の近況ばかり話す老人たちについていけなくなつて、きつと家の中に入っても同じ事だろうと父の隣に添っていた。かといってこうぼつりと佇んでいるのも、除け者にされているみたいだな、と父から目を離して斎場をちらちらと覗いていると、

「あら、紗江……こつちに戻ってきた時以来かしら」

と奥の方から、着物を羽織った咲が声を掛けてきた。こちらへと歩いてきたかと思うと、その後ろから、小さな女の子がばたばたと従ってくる。

「もう歩けるようになったのかい」

煙草を足で揉み消すものの、父は目線を下げないでイトコ姪だけを見ていた。おかげさまで、と微笑みかけた後、おばちゃんと大おじちゃんよ、と子どもと大人を半々に見ながら更に顔をほころばせた。頭をかけた父に代わって、悔やみの挨拶を述べた。咲は少し首を傾げて、それから落ち着いたように一度目を伏せてみせて、来てくれてありがとう、紗江、と頭を下げてきた。その拍子に結っていた頭から数本の髪がまとまってほつれて、頬へと垂れさがっていく。制服を着た咲を見かけた時も、そんな風に髪をほつれさせていた。その時には四年近く大伯母の家から遠ざかっていて、お互いの成長さえ知らないでいたから、電車の中にハトコが乗っていると気付けないでいた。ましてや、同じ高校と思しき男と並んでいたとなれば、嫌気さえ感じて素性を確かめる前に目をそむけてしまう。

けれど、何を話しているかは聞こえないが、そっけない声色をしているくせに目だけはちゃんと男の顔を捉えているらしいのに気付くと、ソネミは薄れて、手慣れたものだな、とどこかから借りてきたような目つきでもって感心してしまった。男はちらりと顔を向けるばかりでそれに応えない。ウブをからかうように女は笑い、それがまた男をうつむかせる。

後ろ姿しか見えないが、制服さえ着ていなければきつと年嵩にみ

えるのだろうか、顔を覗けないものかとじれったく思う内に、女が立ちあがった。私と同じ駅で降りるらしかった。それじゃあ、と告げて軽く手を振るものの、まだ扉が開かないのに取り残された方を振り向きもしない。学ランをダボつかせた男は、またたきも忘れて女の背中を見つめるばかりだった。

扉が開き横を向いたかと思うと、あら、とこちらに気付いたらしく、ほつれた髪で頬をかくしながら、紗江じゃない、と立ち止まった。頬にかくされた顔の全容を明かそうとまたたきも忘れて見つめる内、同い年の友達のように暮らしていたハトコが、いつしか二歳差という年齢さえ通り越して、自分よりもはるかに成長しているのだと思い知らされた。

隣の大学に進んでから二年経つと、咲が職場の同僚と結婚したとの知らせが入った。また一年経つと出産を済ませたとの知らせも届いたが、いずれの祝辞も述べられなかった。半年ほどして実家に帰った頃、この間スーパーで咲を見かけた、と母が言いだして、元々家庭を持っていてみたいに育った子だったわね、お父さんたちが共稼ぎで家にいなかったせいかしら、おバさんの井戸端話にも興味深そうにうなずいてくれる、と電灯をまぶしそうに眺めていた。井戸端話に興味津々だからって所帯じみてるなんてどういう理屈だか、と父がまぜかえずと、大抵おバさんなんて自分の家をどうやりくりしていくかしか考えていないものよ、だから余所の話でも首を突っ込んで参考なり反面教師なりにする、今日だってこっちの顔を離してもせずつと見つめてくるの、昔からそうだった覚えがある……

祖母もまじえた人物評がだいぶ続いたところ、あれはあれの婆さんに似ている、と祖父が出しぬげに大伯母を引き合いに出してきて、どういふことかと問いかけられても、似ていると言えば似ている、と頑固を突きとおした。

「そういえばおばあちゃんね、私が家を出た時よりも、紗江が宮城に行っちゃった時の方が淋しそうにしてたのよ」

娘を抱きながら咲は笑いかけてくる。

「私や雅人はいつも隣にいたからダメなんでしょうね、きつと繰り言を続けていると、自分でも気づいてた。その繰り言を物珍しそうに聞いてくれる紗江が、きつと一番好きだった」

孫娘を前にしてはうなずきづらい話だったけれど、咲は笑みをくずさなかった。

たしかに大伯母をたずねて断られたことはなかった。そしていつも咲が隣に寄り添ってくれて、大伯母の話に共に耳を傾けていた。弟の雅人は遊びから帰ってこなかったり、私を撥ねつけたりしたから、なおさら咲と手を組み男の立場を悪くしようと企てていた。時折繰り言や食い違いを起こす昔話に茶々を入れてくる男の子を、女の子二人がかりで黙らせると、老婆は途切れた所をちゃんと覚えていて調子を変えずに話してくれる。

そう振り返ってみると、隣で共謀していた頃のハトコの姿はすでに遠ざかっており、目の前の娘を抱く母親の顔は、むしろ温かく迎えてくれる大伯母と重なりつつある。

腕に抱かれた娘が上目遣いをして見つめてきた。大人たちの話を

真面目に聴き取ろうとするその顔は、どこか懐かしさを感じる。その横で母親が微笑んでいるのを見ると、本当に共謀していたのは大伯母と咲なのではないか、と今になって疑わしくなってきた。

誰かが定刻を告げたようで、老人たちはまとまって本堂へと入ってきた。間違っても大声は出さぬようにとは言い含められていたが、老人たちは口を閉じなかった。記帳の間も受付に立った雅人に向かってボソボソと何かを話しては、一人で勝手に笑いをこらえている。それを見ていたら、久しぶりに顔を合わせるハトコといかに接したら良いかなどという懸念はどうでもよくなった。げんなりとした顔を浮べる雅人に、ただただ同情を寄せるしかなかった。

だけど、いざ大広間に入って遺族に黙礼すると、老人たちは黙りこくってしまう。父と並んで席を探す頃には老人たちは大方、並べられた座布団の前列に陣取っていたから、私たちは静かな音を音もたてず座るよう促されるような恰好になっていた。どこかでひそやかに声を交わし合っている者はいないかと思いついても、いずれも同じ方を向くばかりで、一体どうしてこの静けさに耐えられるのかと思われて隣を向いたが、父は入口で見せていたように口を軽く開いて背筋を伸ばすと、それきり沈着としてしまった。祖父も祖母も、母も雅人も、咲までも応えてくれない。

やむなく祭壇と向かいあうと、飾り付けられた須弥壇や花たちの真ん中に、大伯母の遺影が陣取っていた。いつ撮ったものか、皺ばんだ顔をしているので少なくとも年嵩になった頃に撮ったのだ

ろうと見当がつく。が、そもそも私が生まれた頃には大伯母は老いていたので、はつきりとはしない。それどころか足しげく家に通っていた頃と、遠ざかってしまっただけの大伯母はどこが違っているかと問われても答えられない私には、どんな姿を見ても間違いなくこれは大伯母だと答えられるくらいの物差ししか持ち合わせていないのだと気付かされた。

遺影は笑っているが、長くは見守ってはられない。第一、写真では話しかけてくれないので、見守りようがない。けれど、参列者たちは一様に遺影と目を合わせられているようだった。語りかけてこない人と向かい合って、一体何を思い浮かべているのだらうと首を揺らしかけたが、遺族たちが立ちあがって住職を迎えたので、いよいよ押し黙らずにはいられなくなった。

住職が遺族と参列者たちに一礼し、遺影と向かい合うと、喪主のイトコ伯父から挨拶があつて、皆で合掌しながら深く頭を下げた。一呼吸おいて住職が数珠をたずさえると、経文がソランじられ始めた。読経が始まれば数珠は指の間に掛けておくべきだと教えられていたが、手を膝に乗せている人も数えられた。手元に経文をひろげているのも横目だろうか。いずれにせよ、皆が首を同じほうに固めていた。

経文はこれだけで夜が通せるではないかと思われほど読み続けられたが、皆が皆、どこにそんな忍耐が備わっていたのか、住職の一字一句を丹念になぞるような声に、姿勢を崩さず耳を傾けているようだった。

そのうち合図でもあったのか、誦経は続いているにもかかわらず、イトコ伯父が立ちあがった。住職の後ろに設えられた焼香場へと進み、右手で抹香をつまむ。ややうつむくと、つまんだ手を額までオシタダいて、香炉にくべる。遺影と参列者にそれぞれ一礼したのを受けて妻が立ち、イトコ伯母とその夫、雅人、咲の夫とつづいて、咲が立った。

焼香場から目を離さず真つ直ぐに進み、足を踏み変えて祭壇と向き合ったかと思うと、ついと顎が上がる。数珠が持ちあげられるまで、他の遺族に比べて長い一拍が置かれ、ようやく深く頭が下がっていく。抹香をつまむ時も同じように深くかがむので、娘を抱きあげる時の様子を思い出した。背筋をもどして額へとオシタダく間も、首の角度だけはしっかりと保たれていた。香炉にくべる時も、数珠がふたたび持ちあげられる時も、また深くかがむ。足をなかせば引きずるようにして三歩下がっていくと、これまで遺影の前に立った遺族たちの立ち振る舞いは、ずいぶんもつさりとしていたと思いつ返されてきた。

つづいて祖父が立ちあがったので、私の順番も意識された。大叔父や大叔母が立つと、遺族席へと座った人々は一通り焼香が済み、父が隣から前へと歩いていく。それから母と叔母が終えて、私が呼ばれた。

最初なのだから、ひとまず形式通りに済ませられるよう心掛けるとは言われたけれど、遺族に向かつて礼をしてみると、それさえも難儀なものだと脛が重くなってくる。焼香場の前に立ってみると、

祭壇と向かいあっているかぎりは見えもしないのに、いくつかの目付き達が後ろからやってくると感じられて背筋が硬くなった。礼をするものの、すんなりとこなせているのかわからない。一通りなぞり終えて下がっていく間、白い目を向けられはしなかったことで、ようやく、どうにかこなせたようだと言われた。

席にもどって気取られないように息をつき、老人たちが前に進んでいくのを見ていると、座る人々はやはり立っている者を見つめているようで、自分達があの場に立った時に意趣を返されると恐れなのだろうかと思いを傾げた。しかし、そんなことは折りこみが済んでいるのだろうかと思つめると、そうやって銘々が見守り見守られ様が、結束のようなものを作っていると見えてきた。この儀礼を一同で首尾よくこなしていく気負いがなければ、目の前のものには立ち向かえないとでもいうように。一同が無言でなければ、無言であり続ける死者を送れないとでもいうかのように。

すると、焼香を行っている間は遺影をまともに見ていなかったことに思い当たって、今更目をやってしまった。といつても最初に目をそらした時の印象は変わるわけでもなく、大伯母の人となりが見えられている写真を見ても、首をひとところに固めることは出来なかった。

住職が退き、喪主から式辞が述べられると、皆が思い思いに立ちあがり始めた。広間から出るとようやく喋り出す集まりもいたが、大抵は長居もせず歩きながら帰り道をたどるか、早々に切り上げて

車に乗り込むようだった。父や祖母も、寝支度くらい済ませておかなければと言つて、そうした流れに加わつていった。

通夜ぶるまいを手伝わなければいけない、と言われていたので、母と共に遺族をたずねると、咲からお疲れ様、と声を掛けられてしまった。

客間に通されると、すでに席は用意されており、やることと言えど酌をするくらいしか残っていなかったのだが、それさえもイトコ伯母や母が世話をした。音頭があつてからも、何もしていない自分の身ばかりが気になつて、箸は伸びていかなかった。

初めは誰もが遠慮まじりにしていたのだが、祖父と大叔父の話題が噛み合ひはじめると、相槌を打ちながら大叔母や住職が加わつていった。また繰り返すか、と雅人が聞こえよがしに言うと、年寄りたちは馬鹿なことを言うもんじゃない、と笑いながら言い放つ。これだから、とボソリと悪態をつくものの、雅人も箸を休めて上座の方を向いていた。

「まあしかし、すんなりと長女から死に始めるとは変な気分だ。どうせ九十になろうと百になろうと生きるもんだと思つていたけれど」

「死線はいくらでもクグつてるような婆さんだったからねえ。あれはいつだったかね？ あの官憲に近しかったお兄さんだと気付かずに弄略しちゃつたのは……」

「私が小学校に上がつて間もなくの頃ですよ。あれで靴が買えたんだから」

「どこから噂が漏れてバイタの履いた靴なんて言われたのを、啓二がとちめてやったんだ。おかげで根も葉もない噂として仕立て上げられたんだ、本当は、深い深いところまで根があつたつていうのに」

笑いはじめた祖父たちを、お父さん、と母がいさめるものの、聞き入れられはしない。住職は場が場だけあつて軽くうなづくにとどめていたようだったが、目元は柔らかくゆるんでいた。

「所詮お前らは潔癖な時代を生きてきたから横槍できるんだ。俺たちは違うよ、誇りを持つているよ？ 姉貴のイキザマを、ねえ」指を差している祖父を、雅人は苦笑をまじえて見やつていた。

大伯母が体を売ることと父を失つた一家を支えていた過去は、親族はいわずもがな、住職のような土地に根差した人なら誰もが知っている。実際大伯母自身、子どもたちにもその頃のことを臆目もなく語ってくれた。その恩恵にあずかつていた祖父が、酔うとなると自分の手柄のように語る姿も見てきた。

「確かに姉貴はバイタだったけれども、けれども間違ひなくお前らは雅也さんの子どもだよ、それは間違ひなく俺が保証してあげる」勢いこんで話す叔父に対して、甥も姪も顔だけ聞くフリをして笑つており、娘は最早、止めることを諦めたようだった。

優しいのだけど、人から感謝されると面映ゆそうにする人だった。大伯母は死別していた夫をそんな風に思い浮かべていた。赤線の手前の喫茶店で働いていると、ツナギを着ているのに小ざつぱりとした客が、いつも夕刻にやつてくる。工場勤めなど大した金は持つて

いないだろうと見積もっていたのだが、そもそも赤線へと踏み入ったこと自体なかったと、抱かれた時になって初めてわかった。宿へ入って体をまじえた後金をせびると、ああ、そういうことだったのか、と今更言い放った。それでも財布を取り出し、求めた額よりも多く支払ってくれた。

明くる日に喫茶店で働く間は、言葉の割にねんごろに扱ってきたから、きつとトボけてみせたのだろうと思いついて返していた。もう来はしまいと、願うように思っていた。これ以上相手にモタれかかってはまずいというような、年頃の女じみた恥じらいがあったのかも知れない。翌日の夕方、小ざつぱりとしたツナギ姿が店にやってくる、自分はいないと伝えてくれと仕事を店長に預けてしまった。

数カ月ほどすると、借家住まいだと聞かされた。どうせウチには父親もいないから代わりとばかりに居座つたらどうだと案を差し出したところ、それもそうだな、と応えてくれた。

「大体雅也さんが香澄の縁談を持ってきてくれたんだよ、あれが核心にやられた時だって人一倍悔やんでいたんだ、それくらいの人をどうして姉貴が裏切れるかね？」

「その割に、雅也さんが亡くなった時は涙も見せなかったけれどね。いや、だから裏切ったっていうんじゃないんだよ？ はじめからどこか間違いを犯したような連れ添い方だったからさ、愛惜よりも申し訳なさがあつたんじゃないかね、だから裏切らなかつた、というわけで」

どうにか論理をつなぎ合わせたことで、大叔父は一段落ついたと

いった具合に息をつき、酒をぐいと飲み干した。住職は何も言わなかつたが、納得したようにうなずきを繰り返している。とはいえ、おおよそ正月や盆のたびに繰り返されてきたことだったから、イトコ伯母や母などはげんなりしたように顔を見合わせて肩をすくめていた。

実際のところ売春のみならず、大伯母に関係する話は誰もが知りつくしていた。

大伯母は夜になれば出歩いてしまうので、長兄の自分まで空けてしまつてはその内誰もが家から出てしまうだろうと、祖父は高校を卒業するまで一切の遊びを知らなかつた。

一方で大伯母が夫を招き寄せたために、何の差し支えもない学生時代を迎えた大叔父は、三十を越えてもなかなか所帯を持たないと親族に愚痴られ続けた。

工業の特需が生まれたことで身入りが良くなり、大叔母はお下がりをもらわなかつたどころか、何かが入用になればあっさりと買ってもらつていた。

当人たちから話された昔話は、すべて大伯母の口からも語られた。「これで香澄も一人でなくなるんだな」祖父がぼつりと言った。「いやあ、お袋や雅也さんだって同じところに寝かせてやったんだが、実際母親同然に育てたのは姉貴だったから」

「この子はまともに育てないといけない、って言つてたね。ちやうど姉貴が赤線の近くに入り浸るようになった頃に物心がついたんだつたか」

「出掛けるところについていこうとすると子どもがついてくるところじゃない、と言って、香澄が泣きわめこうが引き離してましたからね。バチあたりは今更のことだろうに」

「姉貴も香澄も、両想いだったというわけだ。つまり、これでやっとな香澄は本当に淋しくなくなるんだよ」祖父が総括するように言った。

「香澄さんは、紗代さんに憧れていましたものね」住職が口を開いた。「若かりし頃の紗代さんはそれは綺麗でした。おまけに紗代さんは、一人で稼ぎ頭になれるくらい、自立した人でもありましたから」

「その年になっても未練を捨てられんのかね、坊さんのくせに」流れを切るような落ち着いた口調を大叔父が茶化してやると、いやあ、いやあ、と住職はようやく顔をほころばせた。この住職は、夭折した三女と同級生だった。卒業すると寺を継ぐ修行に入ったのだが、ある日買い出しのために遠出してみると、昔馴染みの顔が目の前を横切っていた。顔見知りだからといって話しかけるまでもないだろうと、気恥ずかしさをまじえて見送ったのだが、剣呑な方向へと歩いていくので、何もかもいったん忘れて後ろをつけていった。もっとも、いかがわしい臭いのする奥の方までは踏み込んでいかず、手前の喫茶店へと入っていくので一安心したが、何かがあつてからでは遅いと大伯母に知らせてみると、ニワカに目を剥いた。話はわかりました、ありがとうございます、と頭を下げられて、その日はとりあえず帰された。

この話は内緒にしておくように、と断りつつ語ってくれた大伯母によると、三女は姉の勤めていた老舗の喫茶店を探り当て、店主に素性を明かすと真つ先に雇ってもらい、数カ月ほど働いていたのだという。すぐさま呼び出して詰問したものの、何一つ答えなかった。金が欲しかったのか、私の真似がしたかったのか、男を知りたかったのか……この話を他の兄弟三人から聞かされたことはない。もちろん住職からも——おそらく、大伯母から口封じをされたのだろう。「よくもまあ飽きないもんだ」上座に聞こえないように、ぼつりと雅人がつぶやいた。「まあ、ばあちゃんも昔話が好きだったからな、それを供養にしようってつもりか」

呑みこみはしないが、ガキのように拒みはしない、そんな度量くらはい持ち合わせているとばかりに言い捨てる雅人を、咲はおかしそうに見守っていた。そして私は、雅人の口を挟む仕事を、少しの反発をこめて見つめている。これもまた、この三人で食卓を囲んでいれば、常に見受けられた光景だった。

「供養というより、こういう風におばあちゃんの癖が残って生きていくのよ。アナタにしてみれば、面倒なものでしかないかもしれないけれど」

咲がそう言うのと、雅人はやれやれ、とひがんだように言って目をそらしてしまった。それをからかうように笑った後、咲はゆっくりと立ちあがって、手元の皿を片付け始めた。見ればテーブルの上にはたくさん並んでいた料理や酒は粗方片付いて、時計も九時を回ろうとしている。母は祖父を抑えるのに忙しいと見えて、私が手伝うこ

とにした。

洗い物をする間、咲は黙っていた。特に話すこともなかったから、私もそれに従った。咲と家事を共にすることはあったが、幼い頃は手取り足とりされていたことを思い出す。一通り洗い終えると、そろそろ娘を寝かせなくてはならない、と言って、夫が世話をしている部屋へと向かおうとした。ついてくるかと訊かれ、断る理由もなかったの後に従った。

客間を横目に廊下を渡っていく間、咲はこれまで自分が黙っていたことに気付いたかのように、一人で喋りはじめた。

「みんな、おばあちゃんのおかげで育っていったのね。この家も、この家の家族も。そしてこれからも、きつとおばあちゃんの姿をどこかに隠しながら、皆生きていく。それがわかったから、今日は本当によかった。紗江も、全然変わってなくて良かった」

曖昧にうなずきはしたが、咲は前方を向いていたので、それを見ているかどうかはわからない。フスマを開けると、もう娘は布団で眠っており、父親が隣に寄り添っていた。ああ、どうも、と挨拶をしてきたかと思うと、もうそろそろお開きかな、と妻に確かめて、じゃあ代わりに行ってくるよ、と言って客間のほうへと向かってしまった。

「この子を産んだ時ね、おばあちゃんにずっと寄り添って貰ったの」そう言いながら、咲は娘の額を撫ではじめた。「後からあの人もやってきたんだけど、女の痛みもわからずに頑張れたの大丈夫

だの叫んでくるばかりで、目も合わせやしない。おばあちゃんは、手も握りもせず、ただ座って私のことを見ていてくれた。自分のお産の時のことを思い出していたらしいの。おじいちゃん、連絡があっても帰ってこなかったんだって。その割にツナギ姿で帰ってきたかと思うと、珍しく皺を作って笑って、お父さんを抱き上げたんだって。本当におばあちゃんの孫に生まれてきて、よかった」

私に語りかけているのだから、娘に語りかけているのだから、うつぶいて話す咲の目は少しも動いていなかった。娘も寝息を立てているだけなので、まるで余所の家にズケズケと上がりこんでいる気分になる。

「おばあちゃんと離れて暮らしてから、一緒に暮らしてる時よりもずっとおばあちゃんが近くなった感じがするの。この子をウチで育てながら、おばあちゃんがこんな風に私に接してくれたな、って思いたすと、おばあちゃんが笑ってる姿が見えてくる。別に直接教えられたわけでもないのに、気付いたらおばあちゃんの真似をしている。もしかしたら真似をするよう、仕向けてきたのかもしれない。そうだとしたらきつと、この子にもおばあちゃんが、そんな風に笑いかけてくることがあるかもしれない。」

紗江は、どう？」

こちらを向いてきたけれど、話を聞きながら別のことを思い出していたので、急には答えかねた。とはいえ、曖昧な返答でも咲にとっては十分だったらしく、そうよね、と一人納得したように、また横顔を向けてしまった。

こんな風に、二人で話をしていたことがある。かつて赤線で囲まれ、今は繁華街へと変わっている場所に、中学生になった咲と訪れたことがあった。買い物を済ませ、ファーストフードを食べていると、急に咲が訳知り顔をして、そのあたりの来歴を話し始めた。大伯母たちに何度となく聞かされてはいたが、まさかそこが因縁のある土地だとはなぜか折りこんでいなくて、俄然興味が沸いてきた。はじめは咲に手を引かれる恰好だったが、段々と私が出しゃばりはじめて、気付くと、警官に呼び止められていた。戦中の雰囲気を残している界限に、知らず知らず踏みこんでいたらしい。もっとも、家に帰っても叱られることはなかった。家族のだけれど今度からは気をつけるようにと言いつつも、どこか上の空で他の事を浮かべているような顔をしていた。後で大伯母にそのことを話してみると、聞いたよ、と言ってやはり咎めもせず、こちらの頭を撫でてきた。おそらく大伯母が周囲の人間に対して知っていないことは、何もなかったのだろう。かたや私たちはというところ――

一度、大伯母と二人きりで話したことがあった。戦争が続いていた頃、同じくらしい年ごろの少年を相手に初めて肌を合わせた。空襲や物資不足とは無縁だったこの土地は疎開先として選ばれたために、都会から来たコマシヤくれた言葉を使う少年は、周囲から浮いていた。いじめていたわけではないが、おおかた一年もすれば戻っていつてしまうだろうと皆が思っていて、向こうもそんな態度をチラつかせるから、誰かと話している姿は見たことがない。そんな少年と、掘り上げてからというもの無用の長物と化していた防空壕

にもぐりこんで、息を交わした。

洞穴は声を返してくるもので、外に聞こえやしないかと声をひそめていたが、どんなに堪えても鳴りひびく。なにより、そんな声をよくも出せたものだ、息を切らしながらも呆れられるくらい、喘いだ。家の中に響く親たちの息を聞き取ったことも、夜にわめきだす猫の声も聞いたことはあったが、そのいずれにもまして、体を煽ってくる。まるで防空壕の中に、もう二人、隠れている男女がいるのかと思った。それが、紛れもなく自分だったのだから世話がない。

カビと汗と血の臭いが漂う中、破瓜の痛苦に味わいつつ、余所の男と、それ以後は縁もゆかりもなくなってしまう男と交わった。そんな忘れるべき思い出なのに、洞穴にひびく声には今も引き寄せられる。金に体を預けていた間も、その喘ぎに促されていたのかもしれない。身ごもった夜にも、あの喘ぎは頭の中で聞こえていた：：そう語った後、少年がどうなったのかは教えてくれず、かつて防空壕があったという埋め立てた跡が残る丘を指差した大伯母を、咲は知っているのだろうか。

もっとも、いざ娘を見つめる横顔を眺めると、このハトコの方が、大伯母と過ごした時間は長いことから、私よりも多くの昔話を訊いてきたのだろうという、当たり前前的事实に気付いた。仮に知らなかったことがあったところで、私の方が、知らないことが多いはずだ。

ふと、咲が顎をついと上げた。

「雪ね。いつの間に……」

そう言って、窓の向こうへと目をやった。たしかに、雪が積もっている。暗い中、電灯に照らされて、白い眺めがぼんやりと広がっていた。

翌日の告別式が終わると、義仁から明日会えないかと訊ねるメールが届いた。昨日今日と葬式に出してしまったからと返すと、納得して引き下がってくれた。が、その日の夜、床に入ってみると、死人を送ったから恋人とは会えないというのは、どういう理屈だろうと目が覚めてしまった。それに納得する方も納得する方だ……。

都合がつけいたら、向こうにも葬式に出たことがあるかどうか訊ねてみようかと思って、ひとまず眠りについた。

けれど、一週間ほどして顔を合わせると、それまで考えていたことは忘れてしまっていて、店に入って夕食を済ませた後、いつもどおり抱かれていた。

事が終わると抱き寄せられながら、ずいぶん深い交わりだったな、と息をついていた。義仁に訊くと、お前こそ、と驚いてみせる。それから、再び交わるかのように、肌を合わせてからのことを振り返り合った。

中々目を離さなかったそうだ。いつもなら身をよじったり、堪えられないといった様子で目を背けたりするのに、今日は首をひとつところに据え続けている。醒めた風でもない。触れられるたび、目を潤ませて、身をすくませて、伸ばしていく手を見つめている。暗闇に青く包まれた中、そんな目付きだけはしっかりと読みとれた。

「生半かなことは出来なくなつてな、いつも慎重に扱っているつもりなんだが、いつしかそれさえも思い込みでしかないんじゃないかと怪しくなってきた。自分で言う誇張があるけど、その不実のようなものに追い立てられて、それをどうにか清算しようと、まるでこれまでの交わりまでやり直していくような気になって……」

そうだとすると、現在の体と交わっているのか、それとも昔の体と交わっているのか、疑わしく思われてきたけれど、けだるさが勝って、こちらからも相手の手つきを見たままになぞった。

私の話すことに、義仁はその都度うなずいていた。ほとんど、自覚があつたらしい。けれど、醒めていたつもりはない。けだるさが、何よりの証拠となるはずだ。

「今まで、そんなことはなかったよな」その声に、問いかける調子はない。「お互いがお互いのことを見つめているだけなら、今までもあった。そうだな、これまで見つめていた分が、今日になって一気に積み重なって、まとめて眼差しを向けて来るような……」

大伯母が笑っている顔が浮かぶ、という咲の言葉が思い返される。こういうことだったのだろうか、と思いつつ、記憶の中へと手を伸ばしていくと、抱き寄せる手が強ばっていった。どれだけきつく抱きしめてくるのか、と胸の中から見上げると、義仁は眼をつむっていた。こちらが見上げたことに気付くと、その顔も胸に押しつけてくる。すると、背中を冷たいものが撫でていった。(了)